

Title	近江日野商人山中兵右衛門家の出店経営 : 小田原店 を中心に
Author(s)	鈴木, 敦子
Citation	大阪大学経済学. 2008, 58(1), p. 41-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/14711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 近江日野商人山中兵右衛門家の出店経営

## -----小田原店を中心に\*----

## 鈴 木 敦 子

## 1 はじめに

近江八幡, 日野, 五個荘, 高島など, 琵琶湖 周辺を出身とする近江商人は, 近江を本拠地と し他国稼ぎをすることで知られる。なかでも日 野商人は,楽市の奨励など商業保護に力を注い だ日野城主, 蒲生氏郷が, 伊勢松坂, 会津若松 へと転封された際、氏郷を慕い彼に追従し、そ れらの地で商工業に携わったとされる。日野碗 や売薬の行商をする一方で、古着をはじめ上方 の商品を関東, 東北に持ち下り, 奥州の紅花な どを仕入れて上方でさばく, いわゆる産物廻し やのこぎり商法と呼ばれる商業活動を展開し た」。元禄期には日野大當番仲間の商人組織を 形成するに至り、商業活動における相互扶助と 幕府による保護政策を活用し、また、日野商人 定宿を各街道に置いて, 行商の安全と販路拡大 の礎を築いた。やがて頻繁に持ち下る商品の中

\* 本稿を執筆するにあたり賀川隆行先生,阿部武司先生から多大なご教示とご指導を賜りました。日野商人山中兵右衛門家文書研究会では松元宏,字佐美英機,筒井正夫,青柳周一,佐々木哲也の諸先生方,榑林一美,久岡道武,山口悠の皆様より貴重なご助言を頂戴しました。大阪大学経済史・経営史研究会では沢井実,友部謙一,鳩澤歩,中林真幸,神田ささい。 では沢井実,友部謙一,鳩澤歩,中林真幸,神田さい。 では沢井実,友部謙一,鳩澤歩,中林真幸,神田される空間、 一次の諸先生方,高槻泰郎,結城武延の皆様から有益なコメントを頂戴しました。日野町史編さん室、御殿場市立図書館では山中兵右衛門家文書の閲覧利用にあたり大変お世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

大阪大学大学院経済学研究科資料室助手

e-mail: suzuki@econ.osaka-u.ac.jp

1 日野商人および近江商人研究については『近江日野町 志』(1930), 菅野 和太郎(1941), 江頭恒治(1959)他多くの研究がある。近年の近江商人研究については上村雅洋(2000)参照。

継所を関東に置いて一軒の店を構えるようになると、そこを拠点として徐々に商域を広げ、酒造および醤油醸造業を営む商人を多く輩出することとなった<sup>2</sup>。日野商人の研究といえば、中井源左衛門家の研究があげられるが<sup>3</sup>、本稿では中井家に次いで規模が大きいと目される山中兵右衛門家をとりあげる。

宝永元年(1704),後に兵右衛門を名乗る二十歳の山中万吉は、日野椀二駄を元手に御殿場地方へ行商の旅に出立した<sup>4</sup>。御殿場は鎌倉往還、足柄街道、箱根道の交差する交通の要所である。兵右衛門は享保3年(1718)に伊勢屋徳兵衛の土地を借り、御殿場に「仲本店日野屋を開店した<sup>5</sup>。これが山中兵右衛門家の創業であ

- <sup>2</sup> たとえば行田に本店をおく鈴木忠右衛門家は,熊 谷,忍領長野,上州境,久喜,羽生,古河に店を 持った。野田六左衛門家は安中の板鼻本店の他に, 倉賀野河岸,高崎に店舗を持った。関東で酒造業, 醤油醸造業を営んだ日野商人の事例については,賀 川隆行(2006)を参照。宇佐美英機(2006a)は五個 荘商人や八幡商人と異なる日野商人の特徴として, 製造業の開業をあげている。
- 3 小倉栄一郎 (1962), 江頭恒治 (1965), 宇佐美英機 (2003) など参照。他に主な日野商人の研究として 正野玄三家の研究がある。近世期に関しては上村雅 洋 (2004), 本村希代 (2004) など参照。
- 4 『山中兵右衛門商店二百五十年史』上(1976), 17頁。
- 5 山中家において御殿場 併店も出店の一つに数えられるが、本稿では御殿場地方の最初の経営拠点とした 併店とそれ以外の店を区別するため、 併店を「本店」、それ以外の四店を便宜的に総称して「出店」と よぶことにする。なお、嘉永2年「家政取極之控」 (近江日野商人館所蔵) などでは、「本店」以外の店 は「外店」と称されている。本店の「店勘定細見 帳」は帳簿様式の点からみても出店とは異質であ り、両者を区別することは経営実態の面からみても 有効と思われる。本店と出店の経営動向比較につい ては今後の研究課題とする。

る。その後、御殿場に⑪店、小田原池上に受 店、伊豆南条に受店、沼津上土に デ 店と出 店を構え、本店含め五店舗体制を築いて御殿場 地方の一大商家に成長する<sup>6</sup>。

近世から近代に至るまでの山中家の歴史的概略を扱う先行研究に、松元宏および佐々木哲也の論考がある。松元は、初代兵右衛門の創業から昭和期に至るまでの山中家の歴史を、御殿場地方における社会経済情勢の変化を踏まえながら論じた7。佐々木哲也は各出店の開設経緯を詳らかにし、本家および出店の帳簿類の現存状況を紹介している8。

近世期における山中家の経営について論じた 先行研究として、まず、末永國紀の研究があげられる<sup>9</sup>。末永は本家主人、本店支配人による 家政改革に着目し、所有と経営の観点を含めて これを検討した。一方、青柳周一は、主法金と よばれる報奨金支給制度の導入を、文久期の山 中家における家政改革から明らかにした<sup>10</sup>。賀 川隆行は本家と本店の資産内容の変化を検討 し、本家における糸の仕入れと売却、益金上 納、損失補填などを詳細に論じた<sup>11</sup>。宇佐美英 機は奉公人請状の分析を通じ、奉公人の入店年 齢の幅の広さや、蒲生郡域よりも甲賀郡出身者 が多いといった特徴を指摘した<sup>12</sup>。

このように山中家の経営動向を扱う先行研究

は、日野本家および御殿場 介本店を対象とし てきた。しかしながら、山中家全体の経営実態 を明らかにするためには、本店以外の出店経営 の解明が不可欠である。なぜなら、日野商人の 特徴は, 主人は日野の本家に住み, 手代は関東 をはじめとする遠隔地で店舗経営を担い、且 つ, 多店舗経営を展開する点にあるからであ る。山中家の研究においても、日野本家、御殿 場本店、その他の出店について、それぞれどの ような経営を営み、有機的に連携していたかを 再現し, 提示することが目指されるべきであ り、そのことによって日野商人山中兵右衛門家 の全貌も明らかになる。つまり、本家、本店の みならず, 出店についても子細な検討が必要な のである。そのためのアプローチは、第一に本 家,本店,出店,それぞれ個々の経営体として の活動の内実, 第二にそれらの共時的な相互の 連携、第三にその連携の通時的変化と発展を明 らかにすることである。

本稿では, 山中家全体の経営実態を明らかに するための端緒として、出店の経営活動に照明 を当てる13。まず各出店の沿革を踏まえ、その 経営動向を把握するため、資本蓄積や収益の変 化を概観し、仕入れや販売商品の特質を分析す る。そのうえで上述の分析を小田原店に焦点を 絞り,より詳細な検討を加える。作業手順とし ては,第一に小田原店の経営実態を明らかにす るため、同店の決算帳簿である「小田原店細見 勘定帳」の記載様式を把握し、次にその帳簿構 成の特徴を抽出する。第二に小田原店の経営動 向を探るため、まず、仕入れ、醸造、販売の推 移をみる。次に、特に主力商品である酒および 醤油に主眼をおき、それらの販売の推移と収支 の趨勢を検討する。第三に小田原店と本家、本 店とのあいだの資金の流れを検討する。そのた めにまず、小田原店の資産負債勘定の推移を確 認する。次に、資産負債勘定に記載される元手

<sup>&</sup>lt;sup>6</sup> 近世期に事業の礎を築いた山中家は明治後期に大き な飛躍を遂げるが、御殿場地方において、山中家の 経済規模が他を圧倒していることを、筒井正夫は御 殿場帳戸数割等級から指摘している(以下、筒井正 夫(2006)、表1、27頁より抜粋)。

本店等級 課税額 御殿場酒店等級 課税額 明治24年 1等 8.00円 8 等 1.00円 明治45年 特1 54.65円 1等 9.00円 (原拠「御厨町町会議書」)

<sup>7</sup> 松元宏 (2006a)。なお,明治19年2月改めの本店勘定 帳を紹介したものに松元宏 (2006b) がある。

<sup>8</sup> 佐々木哲也 (2003), (2006)。

<sup>9</sup> 末永國紀 (1997)。

<sup>10</sup> 青柳周一 (2006b)。

<sup>11</sup> 賀川隆行 (2005)。

<sup>&</sup>lt;sup>12</sup> 宇佐美英機 (2006b)。明治期に関しては宇佐美英機 (2007) 参照。

<sup>&</sup>lt;sup>13</sup> 本稿では各店舗を便宜的に地名を付して表記することにし、必要に応じて店印を補う。

金,株金,利息,益金に焦点を絞り,小田原店と本家,本店との資金面の関係について検討する。このことにより,小田原店の位置づけを確認すると共に,出店機能の一端を捉える。

山中家文書は近江日野商人館に約7千点,御 殿場市立図書館に約3千点が所蔵されてい る<sup>14</sup>。経営史料としては、本店および出店にお いてそれぞれ作成された「勘定細見帳」という 決算帳簿がある。そこで本稿では, 各店舗の 「勘定細見帳」を主たる対象史料とする。近世 期から明治初期における,各出店の「勘定細見 帳」から決算状況を確認できる期間は、御殿場 酒店が天保8年(1837)下期から明治5年 (1872) 上期, 小田原店が天保4年下期から明 治5年上期、伊豆店が天保7年から明治4年、 沼津店が嘉永5年(1852)から明治4年までで ある。小田原店は御殿場酒店に次いで開店した 店であるが、出店四店舗のなかで最も長期的な 追跡が可能である。本稿で小田原店を詳細に扱 うのはその理由による。

以上のように、山中家の出店、特に小田原店の「勘定細見帳」を分析することにより、山中家における経営活動の全容を明らかにする端緒としたい。

## 2 全出店の沿革と主要商品の仕入れ・販売

全出店の販売品および事業内容の検討にはいるまえに、まず、各店舗の創業および加入の経緯を概観しておく。 企本店が御殿場に開業して82年後の寛政12年(1800)に、御殿場村名主平右衛門から酒株などを譲り受け、酒造業を開始した店が御殿場酒店である。 ①店と称する。小田原店は ②店と称するが、その前身は 一門店で、文化8年(1811)に相州関本村の伝蔵が所持する酒株99石を本店支配人が15年季で借り受け、翌文化9年に関本村に開設された。

匣店は文政2年(1819)に閉鎖され、小田原城下により近い池上村に移転し ②店として酒および醤油の醸造業を営んだ。伊豆店は元来、山中家の分家である山中与兵衛が南条村で醤油醸造を行っていた店であったが、経営困難から天保7年に本家、兵右衛門に譲渡された。 ②店と称する。沼津店も分家与兵衛の店で「研しと称していたが、与兵衛から本家が買い取り、嘉永4年に 所と改称して酒類販売業を開始した15。以上が各店の沿革の概略であるが、その他、委細がわかる場合は出店ごとの論述内で触れることとする。

これら四店舗の経営実態を明らかにする手続きとして,以下ではまず第一に各店舗の販売品を抽出し,商品群の傾向を示したうえで,主要な原料や商品の買高および売高から,各店舗の主たる営業品目を確認する。第二に各店舗の経営活動を個別検討していく。更に各店舗の資産負債勘定,収益費用勘定の変化を概観し,仕入れや販売商品の特徴を分析する。なお,取引先がわかる場合や,出店間での商品流通がみられる場合はそれを示すことにする。

## (1) 出店の販売品および事業内容

天保4年下期から明治5年上期のあいだで確認できる,各店舗それぞれの「勘定細見帳」の 売高から販売品を抽出したのが〈表1.出店販 売品〉である。

全店に共通する主な販売品は、酒、醬油、 酢、米、大豆、塩などで、醸造品や穀類、原料 品が中心であることがわかる。しかし、伊豆 店、沼津店では、本家に譲渡される以前より、 醸造品や穀類のみならず、日用品類を含む多様 な商品を扱っている。たとえば、伊豆店では太 物などが、沼津 町店では炭、灰などが販売さ れている。山中本家に引き取られてからは、伊 豆店では炭、鉄、古着などが、沼津 町店では

<sup>&</sup>quot;近江日野商人館所蔵の近世山中家の文書については 青柳周一(2006a)を参照。

<sup>&</sup>lt;sup>15</sup> 『山中兵右衛門商店二百五十年史』上(1976), 62 頁。

表 1. 出店販売品

#5	小田原店	御殿場酒店	② (譲渡前)	豆 店 <u>                                    </u>	円 (譲渡前)	性 店
哲 尭酎	0	0	0	. 0	0	0
龙 <u>印</u> 玄白					0	0
(諸白) 崩						ŏ
餐油	0	0	0	0	0	Ŏ
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		Ŏ		!		Ü
卡酥	0	Ŏ		. 0		0
ć	Ŏ	Ŏ	0	Ŏ	0	Ŏ
J手米	Ö					
F米	Ŏ					
5米						
引米		0		i		
<b>馬米</b>		0				
3米		0		1		
>麦	<u> </u>			<u> </u>		<u> </u>
麦	<u> </u>	0	0	<u> </u>		<u> </u>
· 显	<u> </u>	0	0	9	0	<u> </u>
卫	<u> </u>			. 0	0	0
友	<u> </u>	-	-	1		
字友	<u> </u>		-	1	-	
神 神 神 神 神 神 神 神 神 神 神 神 神 神	<u> </u>	2	-	1		
京 <u>友</u>		0	-			
円立	<u> </u>	-		<u> </u>	-	
1140	$\sim$			0		
				-		
- 柏 - 柏 - A - A - A - A - A - A - A - A	<u> </u>	0	-	. 0	0	0
1.桁						
<b>丁</b> (駅 !:			0	1		
Ľ	$\cap$				0	0
· 括	$\overline{}$		- 0		0	0
: 作生 -	$\overline{}$					0
つま (とすま、桝)	$\overline{}$					
学	Ŏ			-		
新	Ŏ			1		
<b>上</b>	Ŏ					
E Dak	ŏ	0	0		0	0
(油 (油)				;	Ŏ	Ŏ
1		0	0	<del> </del>	Ŏ	Ŏ
· 西林 米白				:		Ŏ
でり約					0	
抽粕	0					
-				0	0	
ŧ				Ŏ	Ŭ	
:噌			0	. 0	0	0
菜				. 0		
加柏				<u> </u>		
:				1	0	0
<b>注</b> 種					Ō	
麺			Q		0	
に物			0			
実						0
水						0
(燭				. 0		Q
一鰯 三應丸 三應丸				!		0
應丸						0
<b>B</b> 應丸				-		<u> </u>
2 発出				<u> </u>		0
<b>三</b> 条				<u> </u>		
之茶 >糖 ] 						
延						
改						
£ +/2						
1.77		-	-	0		
ic久 k f)挽 K K A A A A A A A A A A A A A		-	-	. 0		
当		-	-	-		0
1		-	-	0		
		1	1	i	1	$\cap$

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場酒店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

干鰯,薬(感應丸,萬應丸)などが販売されて いる。このような商品の幅広い取扱いは、多種 商品販売を営む本店と共通する16。販売品の点 から出店四店を大別すれば, 主として醸造品や 原材料品を扱う小田原店や御殿場酒店と, それ 以外の日用品類をも含む伊豆店や沼津店とに よって構成されていることがわかる。

次に、各店舗の「勘定細見帳」より、これら 出店における原料や商品の主要なものを買高に ついて抽出したのが〈表2. 出店買高〉であ り、同様に売高について抽出したのが〈表3. 出店売高〉である。

酒造には米が、醤油醸造には大豆が必需原料 であるが、酒や醤油をどの店舗でも醸造してい たわけではないことが〈表2〉〈表3〉からわ かる。たとえば、御殿場酒店や沼津店では一貫 して売高に醤油が記載されているが、醤油醸造 に必要な小麦の仕入れがない。よって、両店で 醤油醸造が行われていたとは考えられない。御 殿場酒店では小田原店や伊豆店から買入れた醬 油を販売しており、仕入れた大豆は醤油原料と してではなく、商品として販売していたとみら れる。

酒の売高では沼津店が最も多い年が頻繁にみ られるが、米の仕入れが小田原店、御殿場酒店 に比して少ないことから, 小田原店, 御殿場酒 店のように自店舗で醸造するというより、仕入 れた酒を販売していたと考えられる。

以上のように、主たる原料および商品の売高 および買高から四店を概観すれば、小田原店は 酒および醤油の醸造, 御殿場酒店は酒造, 沼津

店は酒の販売, 伊豆店は醤油醸造を中心に経営 がなされていたことがわかる。以下では各店舗

小豆, 売掛金などによって構成されている。

ごとに、それぞれの経営動向を更に詳細に検討

## (2) 各出店の経営動向

#### ①御殿場⑪酒店

確認できる。

日野屋忠助 (三代目兵右衛門) は寛政12年 に、御殿場村名主平右衛門から酒株24石を、板 蔵, 諸道具, 林一カ所を含め200両で譲り受 け、店や酒蔵の普請に着手し、酒造業を開始し た17。これが (11) 店である。当初30年季での譲渡 であったが、天保11年には永代譲渡となってい る18。「御殿場酒店勘定細見帳」は、小田原店の それと同様、秋(上期)と春(下期)の年二回 決算である。

行っており、酒、焼酎、醤油、酢、塩の販売を 主としている。酒は天保から弘化期において平 均すると約780石、嘉永から万延期において約 820石, 文久期以降は約670石醸造している。 〈図1. 小田原店と御殿場酒店の酒造高〉は同 じく酒造業を営む小田原店の醸造高と比較した ものである。天保から弘化期において御殿場酒 店は小田原店より平均して約2.4倍、嘉永から 万延期において約1.6倍, 文久期以降は約1.9倍

の酒を生産している。よって、山中家において

酒造業主力店の筆頭は御殿場酒店であることが

御殿場酒店は酒, 焼酎の醸造および製造を

酒以外に他の店に比して御殿場酒店で特に取 扱いが目立つのは塩の販売である。塩は大豆や 小麦と同様,醤油醸造に欠かせない原料である が、御殿場酒店では醤油の醸造は行っていな い。しかしながら、小田原店より塩の買高、売 高ともに多い。「御殿場酒店勘定細見帳」の金

崎 介本店の決算簿である「店勘定細見帳」から、四店 の出店が揃った嘉永元年の資産内容をみると,「海上 諸国有物」の部では、わらび粉、布のり、ひじき、 扇子, 打物入, 小割鉄, 太物, 白粉, 鏡入, 染木 綿, 丸のへ鉄, 甲州糸などがある。他に資産内容 は、蔵五カ所の有高、店現金、くり綿、米・大豆、

<sup>&</sup>quot; 寛政12年12月「酒株証文之事」(近江日野商人館所 蔵)。なお、200両のうち42両が平右衛門の無尽借用 金の肩代わりであったことから, 御殿場村名主家と 新興商人の勢力交代の指摘がある(『御殿場市史』8 通史編上(1981), 308頁)。

<sup>18</sup> 天保11年8月「永代譲り申酒株之事」(近江日野商人 館所蔵)。

表 2. 出店買高

20. 1	7. 万人	ale.		
会計年		米 御殿場酒店 御殿場酒店買入 本店買入	伊豆店 沼津店	
天保4年		(表斗升合)     (表斗升合)	俵斗升 俵	駄 石 斗 升 合 22 2 2 0 方々より買入
天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天 天	F 1,323 1 8 0 L 1,580 3 8 6 古米新米 F 1,233 2 0 0 L 1,348 3 0 0 F 267 3 1 7 L 1,005 0 0 0	1,643 6 0 6 512 3 2 0		酒方々下D色々買入 酒焼酎買入 酒方々買入 酒焼酎買入 酒焼酎買入 1樽 0 0 0 0 下 P)酒 正中酒買入
天天天天化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化化	下	$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	1,032 3 4 50 1,532 1 1 131	103
安政6年 万延元年 万延元年 文久元年	上 2,914.5 0 0 0 F 1,661 2 7 0	661 0 0 0 1,696 3 5 0 1,051 0 3 5 1,326 1 6 0	109 49	114.5 0 0 0 0 149.5 0 0 0 0 198 0 0 0 0
文久元年 文久2年 文久2年 文久3年 文久3年	F 1,822 2 1 5 E 1,949 2 1 5 F 1,475 3 7 5 E 1,586 0 0 0	408 3 3 8 1,694 1 7 5 1,008 3 4 0 1,694 1 7 0 1,213 0 0 0 1,414 1 7 5 1,213 0 0 0 1,414 0 0 0 731 0 0 0 731 0 0	184 234	99.5 0 0 0 0 221 5 0 0 80.5 0 0 0 0 140 0 0 0 0 199 0 0 0 0 地消下り酒
元元慶慶慶慶慶煛明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明明市 在元元元元元元元元元元	F 1,675 0 0 0 0 E 2,038 0 0 0 0 F 1,108 0 0 0 0 E 1,225 2 5 0 F 803 0 6 0 E 1,514 5 0 0 0 F 1,096 0 0 0 E 1,525 0 0 0 E 1,825 0 0 0 E 1,832 8 0 0 米色々 868 8 1 0 米糯米共 E 1,806 3 9 8 米取合 F 1,292 6 5 0 米糯米共 E 1,633 0 0 0 米取合	1,000 0 0 0 1,737 2 5 0 1,000 0 0 0 1,737 2 5 0 1,087 9 2 0 567 2 7 0 1,087 9 2 0 567 2 7 0 586 0 0 0 204 2 0 0 580 0 0 0 1,045 5 0 0 870 0 0 1,115 5 0 0 103 0 0 1,764 5 0 0 2 0 0 0 995 1 2 0 999 1 8 5 1,818 9 2 4.5 1,868 9 2 4 2,450 7 7 0	133 645 56 93 333 45 245	101.5 0 0 0 0 地酒下り酒 213.5 0 0 0 0 0 148.5 0 0 0 0 地酒下り酒 329 0 0 0 0 190.5 8 4 0 0 281 2 6 4 27 0 5 9 236 2 7 8 137.5 0 0 0 0 180 0 0 0 0 85 0 1 0 0 40 0 0 0 0 82.5 0 0 0 0
明治5年.	上 1,533 0 0 0 米取合	2,450 7 7 0		215 0 0 0 0

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘 定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

					r	,						,	焼酉	Ħ	,				醤油	r	,
f	卸展	25場	酒厂	吉	伊豆店	沼津店	刁	<b>、田)</b>	原店			御展	場	酒店	i	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店
石	+	升	合			駄	駄	石	斗	升	合	石	斗	升	合 -		駄	樽	樽	!	樽
_											=	_			-						
=							酒	焼酢	買力	Ĭ,		_			-				; ; ; ;	i 	
							酒	焼酢	買力	Ĭ,		_			-					!	
							正	中酒	買力	Į.		=			_				_	i ! !	
							- 酒:	焼酢	買力	į,	-		1	9	6				544 份 1,573 份	!	
							20	0	2	6	5								234 ⊕ 839 ⊕	i ! !	
10 (	0	0	0	徴・肝			15 35	0	0	0	0								234 839 323 1,288 1	! ! !	
	-			0 11			21 21.5	0	0	0	0	i !							· 939 (大)	i ! !	
																			641 $\otimes$ 284 $\otimes$ 534 $\otimes$ 89 $\otimes$	!	
	_		_				34.5 10	0	0	0	0								534 ⊗ 89 ⊗	!	
15	8	8	5	地酒			47 31	1	5 0	5 0	5 0	! !			į				344 ⊕ 265 ⊕		
							44 14	1 1	8 5	1 3	4								265 ⊕ 521 ⊕ 206 ⊕	! !	
						(酒632.5駄15石1斗4升6合)	52 20	2	1	3	0								468 ⊕ 162 ⊕	!	 78
						(遠州酒15石8斗7升2合) (遠州酒20石3斗2合)	41.5 12	8	4	7	3	9	2	6	4				351 ⊕ · Љ 102 ⊕	! !	44 55
						(諸白味醂754.5駄) (諸白味醂358.5駄)	71 13	1	4	9	6						(8石5升8合) (2石1升1合)		211 148	i i i	40 46
20	2	8	4			(昭口水師336.33人)	57.5	0	0	0	0	2	3	4	3		241/110/		279 ⊗ ⋅ ⊗	! ! !	
							8 117.5	0	0	0	0								186 459 ⊗ · ⊗	i ! !	
3 (	0	0	0	$\otimes$			14 44	0	0	0	0	4	4	6	9				265 619 ⊗ · ⊗	! ! !	
						酒836	53.5	1	2	1	0								48 300 ⊗ · ⊗	i ! !	292
						酒1,451	82.5	0	0	0	0								172 438	! ! !	236
						酒1,863.5	22 58	0	0	0	0	1	4	2	0				90 230	i ! !	188
						酒1,838	1.5 57.5	0	0	0	0	13							70 456	! ! !	169
51	2	7	5	替り酒		酒2,956.5	3 71	0	0	0	0	:		9					186 ⊗ · ⊗ 462	i ! !	141
10 :	3	3	0		1		4	0	0	0	0				- 1				171 🕾	! !	:
				省り個		諸白2,409.5	58 2	0	0	0	0	15							432 222	i 	113
13	ь	9	0			酒2,868	64	0	0	0	0	1	4	0 2	8				129	! !	84
						諸白2,375.5	67 10	0	0	0	0	13	9	5	7				186 なし	i ! !	29.5
						酒2,581	67.5 5	0	0	0	0	2	1	3	0				なし	!	22
42 73					!	諸白味醂3,406	49.5 12	0	0	0	0	9	4	0	0				117 66	! ! !	
19	_				!	諸白味醂3,249.5	6.5			0	- 0	_			- }				130	! ! !	27
27				J		諸白味醂4,310.5		29	1	5	0	4	1	9	4				256 111	! ! !	162
						諸白5,183	61	0	1	0	0								288	!	39
95						諸白3,712	16		8		-	_			- }				184	: ! !	174
25 89						諸白3,562.5	15 67	0		0	0	1	9	7	2				105 /箱\酱油 172	!	129
						諸白1,744	3 42	0	0	0	0								38 14	: ! !	125
21 21			8			諸白1,518	5.5		2	0	0 6	4	6	2	1				36 100	!	64
14 14	5	4	0			諸白1,045	36.5			0		2		4			30		168 307	, ! !	
30					!	諸白1,883.5						3 13	3	5 2	6		30 23		114 275	1 1 1	20 45大樽2
					! ! !	諸白2,205.5	36.5	2	0 7	9	9								99	! ! ! !	:
56	Ŏ	Э	2		-	諸白2,217.5	25.5	1	6	9	9			1			4びん		223 542	: ! !	11
						諸白2,622	36.5								- 1		45	54		!	155
36 (註)	0				 ハことを5		61.5							5					235 帳簿から抽出し	<u> </u>	<u> </u>

<sup>(</sup>註) — は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。( ) は譲渡以前の伊豆店, 沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。■ は虫損を示す。

表 2. 出店買高(続)

24 2 .	ш,	古貝南 (枕)									the state of the s
AN-F	#H		大豆								塩
会計年	朔	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店 沼	2津店	小田原店	御殿場酒店
天保4年	下	俵斗升合 244 1 9 0	俵斗升合	斗 升	俵	俵斗升合 176000	- 俵	俵 斗 升	俵	俵 斉田80 赤穂266	俵
天保5年	上		ļ — į		-			1	—		
天保5年 天保6年		361 0 0 0 448 0 0 0				174 1 2 0 333 1 1 5				460; 607	
天保6年	下	208 0 0 0			_	143 1 0 0		1	—	赤穂315	
天保7年 天保7年		482 1 1 0 117 0 0 0				317 0 3 0 96 2 0 0				708 才田86	
天保8年	上	288 3 8 0			_	131 3 6 0			—	543	
天保8年 天保9年		872 1 3 0	14 5 2 5 17 4 1 2			502 0 1 0				1 185	753 町 1,987
天保9年	下	379 2 3 5	62 0 5 0		—	302 0 1 0				229	345
<b>尺保10年</b> 尺保10年		373 0 0 0 191 0 2 0	63 0 5 0 45 0 8 4			266 0 0 0 7 0 0 0				649 赤穂300	1,506 3軒にて 788
天保11年	上	586 2 6 0	45 0 8 4		_	245 2 0 0				850	1,900 沼津3軒にて
₹保11年 ₹保12年		1,099 0 0 0 307 1 5 0	13 0 0 0 13 0 0 0			138 0 0 0 315 3 6 0		1	_	620 568	600 2,094
<b>F保12年</b>	下	14 0 0 0	1.5 0 0 0		—	11 0 0 0				分塩8	467 沼津2軒にて
₹保13年 ₹保13年		1,267 0 0 0 311 0 0 0	12 2 5 7 474 0 0 0			365 0 5 0 166 0 0 0		1	_	900; 赤穂130;	1,583 沼津2軒分 159
天保14年	上	685 0 0 0	476 3 0 0		—	437 0 0 0				450	1,610 両家にて買入
天保14年 仏化元年		236 0 0 0 553 0 0 0	727 4 0 5 1 727 4 0 5			43 0 0 0 311 1 0 0			_	3,199 塩品々3,204	525 才田
ム化元年	下	179 1 0 0	12 0 0 0		_	178 0 0 0				赤穂100	1,041
以化2年 以化2年		302 1 0 0 297 0 0 0	22 1 5 5 54 0 0 0		(38)	454 1 4 0 166 0 0 0		- 1		赤穂200 赤穂200	4,325 1,070 3軒分買入
仏化3年		620 3 0 0	56 0 0 0		(242)	412 0 0 0				赤穂600	4,531 4軒分
ム化3年 ム化4年		274 0 0 0 736 0 0 0	24 0 0 0 24 0 0 0		(110) (87)	167 0 0 0 331 1 0 0				赤穂450	2,004
仏化4年		138 0 0 0	73 0 0 0		(115)	283 3 0 0		1		800	581
永元年		656 2 0 0 164 1 5 0	73 0 0 0 18 0 7 0		—	601 2 0 0 29 3 0 0			—		3,148 沼津3軒にて 1.116
系永元年 系永2年		164 1 5 0 727 2 1 0	18 0 7 0 18 0 7 0			29 3 0 0 482 2 0 0			_		1,116 2,124 沼津4軒分
永2年		770 2 0 0	6 0 0 0		—	419 0 2 0			_	赤穂870 才田50	1,281
「永3年 「永3年		651 3 0 0	6 2 3 3 6 0 0 0			507 2 0 0					4,845 沼津塩5軒分
永4年		696 2 0 0	8 0 0 0			458 0 0 0					3,935
≣永 4 年 ≣永 5 年		720 0 0 0 568 2 0 0	185 0 0 0 188 0 2 2	488 3		58 0 0 0 494 0 2 0		710 1 4		230 1,311	465 2,877
永5年		138 0 0 0	4 0 0 0	<b>5</b> 04 0	000	40 0 0 0				赤穂300	159
脉 6 年 脉 6 年		389 1 9 0 387 3 3 0	8 0 0 0 14 0 2 2	784 0	200	278 0 5 0 297 0 0 0		975 2 3		800 赤穂200 才田100	1,988 428 方々にて
政元年	上	702 3 3 0	14 0 0 0		571	755 0 0 0				900	858
₹政元年 ₹政2年		409 0 0 0 643 3 4 0	280 0 5 0 282 0 5 0			227 0 0 0 536 1 0 0				赤穂650 才田100 1,250	584 2,059
改2年	下	124 0 0 0	130 0 0 0			110 0 0 0				446	1,334
政3年 政3年		378 0 0 0 163.5 0 0 0	130 0 0 0 325 0 0 0		104	462 2 1 3 78 0 0 0				848 ; 700 ;	3,446 548
改4年	上	490 2 0 0	325 0 0 0		236	462 0 0 0		1	100	774	2,983 5軒分買入〆
₹政4年 ₹政5年		414 0 0 0 794 0 0 0	154 0 0 0 154 0 0 0		756	305 0 0 0 540 0 0 0				赤穂302 952	1,283 4,322
政5年	下	86 0 0 0	45 0 0 0			6 0 0 0				赤穂557	1,183 4軒分買 🗸
安政6年 安政6年		439 0 0 0 113 0 0 0	45 0 0 0		700	259 0 0 0 41 0 0 0		į	40	赤穂807 才田11	2,073
7延元年	Ŀ	608 1 0 0	14 0 0 0		14	172 0 0 0				赤穂才田塩買入	
延元年 久元年		78 0 0 0	4 0 0 0			18 0 0 0				赤穂300	833 3軒買入分
久元年	下	100 0 0 0	77 0 0 0			15 3 0 0				赤穂200 分塩300	
∑久2年 ∑久2年		220 0 0 0 346 0 0 0	78 0 0 0 218 0 0 0		422	464 3 0 0 51 0 0 0				赤穂300 赤穂450 才田456	
久3年	上	353.5 0 0 0	218 0 0 0		160	214 0 0 0				1,574	2,271
(久3年 治元年		359 2 6 0	8 0 0 0		150	149 0 0 0		1		赤穂250 650	
治元年	下	60 0 0 0	6000		130	15 0 0 0				赤穂斉田860	91
ē応元年 ē応元年		203 1 0 0 177 0 0 0	8 0 0 0 1			244 0 0 0 21 0 0 0		-		1,260 赤穂100	709 482
応2年	上	542 0 0 0	16 0 0 0			450.5 0 0 0				930	701
ē応2年 ē応3年		266 0 0 0 471 0 0 0			619	32 0 0 0 351 0 0 0				503 903	737 888
応3年	下	184 0 0 0	287 0 0 0			6 0 0 0		İ		600	803
治元年		188 0 0 0 75 0 0 0			252 258	8 0 0 0				斉田600 120	
治元年  治 2 年		178 0 0 0			258 88	145 0 0 0		į		120 170	760 1,512
治2年	下		相州大豆20 0 0 0			56 0 0 0 176 0 0 0				550	352 515
月治3年 月治3年		137 0 0 0 318 0 0 0				176 0 0 0		:		1,380 510	515 1,713
治4年	上	370 0 0 0	8000		170	415 0 0 0				1,000	9, 242
治4年  治5年		349 0 0 0 375 2 0 0				$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	98	_		752 902	105 724
			3 0 0 0   	A4::::::::::::::::::::::::::::::::::::	2 )- IV			#E   F&n Dh JB eb	461 -4- 60	502;   目帳 「伊豆店勘:	

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘 定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

			酢				味醂	:	
伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店		沼津店
俵	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	樽 12		樽	樽 ————————————————————————————————————	駄		樽	小樽 
赤穂 900 分塩1,600 大1,093 小1,450	(1, 205) (1, 940) (1, 470) (966) (917)	20 57 54 55 35 35 52 21 9斗7升 56 9斗7升 30 88 67 84 1斗3升 22 133 39 97 92 141 74 139 68 140 68 140 68 177 71 208 54 213 66 188 ———————————————————————————————————	6.5駄 町 ②・町 15樽 山長殿・③ 22樽 山長殿・③ 120樽 町 30樽		(192) (大樽406 生酢14族5合) (371) (508) (281) ————————————————————————————————————	1 様 3 2 2 2 10.5 2 7.5 1.5 5 1 4.5 3 8.5 2 6 6 13.5 3 3.5 3 12.5 读献失逝酒8石1斗 4.5 7 2.5 8.5 7 7 2.5 8.5 5 7 8.5 5 7 8.5 5 7 8.5 5 7 8.5 5 7 8 8.5 5 7 8 8.5 5 7 8 8.5 5 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8		61.5 53.5	(年22) (諸白味醂653駄) (諸白味醂554.5駄) (諸白味醂358.5駄)
	1,059 1,580 赤穂塩280 分塩1,800	99 229 73 185 49 163 47 133 52 149 38 144 55			569 546 532 641 610 583	3.5 10 2 8.5 2 12 2.5 18 樽 18.5 3 8			173
	988	82 10本入117樽 41 6ツ	; ; ; ; ;		745	7.5 1斗 2.5	8升入り21樽		182
	30	60			258	1			47
	100	157 44	12石9斗6升3合		460	2	! ! !		170
	560	127 6斗 94	! ! !		739	9 5			75
	1,838	91 6樽 180 小樽6	! ! ! !	!	377	20.5			
	120 1,010	60	1 1 1 1	!	303 81	10.5 2.5 5.5			38
	!	大樽46 小樽180 大樽68 小樽180	 		60	8 樽 15 樽	!		9駄小樽5
	1, 562 1, 965 2, 791	20 60 24 32	26石6斗9升3合		17 852®	70.5 1.5 4.5			8.5 12.5駄 21駄
	1,250	4 21 49 20	62石7斗 働 3石		2,005 1,870	1.5 3 4.5			14.5駄小樽64 28.5駄小樽22
	:	20	12石	:		4.5	1	: :	

(註) ――は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。( ) は譲渡以前の伊豆店、沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。

表 3. 出店売高

交 3. 山岸	17010)	*				<u> </u>	酒		
会計年 期	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	Z津店	小田原店		伊豆店	 沼津店	小田原店
	俵 斗升台	1	俵 斗升合	俵	石斗升合	石斗升合	樽/駄	(諸白)駄 石 斗升合	石斗升台
天保4年 下			(111 0 0 0)	=	146 0 0 0				165 0 4 2
天保5年 下天保6年 上	194 0 0 0			_	207 4 2 4 - 398 7 7 1 -				206 7 6 2 462 7 7 7
天保6年 下	203 0 0 0		067 0 0 0		215 1 8 5		<b>建占10 『卧</b>		215 0 1 0
天保7年 上 天保7年 下	37 0 0 0		,067 0 0 0	_	59 9 3 4		諸白13.5駄		511 4 2 6 76 7 6 1
天保8年 上		1	.,042 0 0 0 1	_	206 0 0 0	249 1 9 0	63樽;		307 0 3 5
に保9年 上 に保9年 下	1,502 0 0 0 433 0 0 0	- 1	745 0 0 0	= $ $	364 4 1 6 171 9 1 2	656 2 5 3 197 8 2 0	2.5駄		484 9 4 6 192 1 8 8
天保10年 上 天保10年 下	1,085 0 0 0		658 0 0 0	= $ $	358 1 0 2 201 0 3 2	547 0 8 5 217 5 1 5	10樽		477 1 5 0 201 0 3 8
<b>E保11年</b> 上	842 0 0 0	2	790 2 0 0		404 0 3 9	778 1 8 5	3樽		538 2 9 4
天保11年 下 天保12年 上	1,119 3 2 0 1,046 0 0 0	2 10	838 0 0 0	_	366 6 8 7 373 9 6 2	391 4 9 3 952 5 4 8			309 8 7 6 453 3 7 8
	249 3 4 0 1,335 3 8 0		.059 0 0 0	_	154 4 8 2 527 3 3 6	503 3 5 3 834 3 7 0			167 0 4 2 505 1 2 5
天保13年 下 天保14年 上	274 0 0 0 1,313 0 0 0	1	,420 2 0 2	=	205 3 6 1 475 2 7 8	219 3 1 0 721 5 6 1			128 0 3 2 346 0 2 2
に保14年 下	1,432 1 2 0 2,147 0 0 0	8	711 2 0 0		359 2 2 1	615 3 2 8			277 2 1 1
4化元年 下	1,744 3 2 0	3		= $ $	328 7 2 2	461 9 9 5			272 2 7 0
ム化2年 上 ム化2年 下	2,462 3 2 0 726 2 0 0		832 0 0 0	(13)	552 8 9 9 1, 445 5 0 5	,052 8 4 0 466 7 4 3		(諸白226.5 271 2 8 0)	476 0 4 8 324 5 2 7
公化3年 上 公化3年 下	1,971 1 0 0 1,376 3 2 0		658 3 0 0 1	(391)	677 3 1 9 1, 244 3 5 0	,002 2 3 0 2 288 6 8 1		(下)諸自362.5 酒351 7 5 5) (諸白239 酒208 4 7 1)	546 3 0 8 239 9 7 9
化4年 上 化4年 下	1,708 3 2 0 1,539 1 7 0	1	,170 0 0 0	(569)	509 0 2 1 349 8 8 0	797 4 0 1 407 5 4 1		(諸白459.5 酒267 2 5 2)	465 0 1 6 274 1 3 7
系永元年 上	2,549 0 7 0	白米8	825 5分	—	678 3 2 6	924 6 2 8			560 3 2 6
孫2年 上	1,185 0 0 0 2,486 0 0 0	御蔵米2 1	,110 1 3 0	_	599 9 6 1	344 8 9 1 873 0 9 4			661 2 5
系永2年 下	995 0 0 0 1,781 0 0 0	2;	835 2 3 7	=	299 6 9 9 677 0 4 3 1,	339 0 2 6; ,010 6 9 1			334 5 4 649 0 9 8
系3年 下	1,025 0 0 0		812 2 0 0		675 9 2 4	176 9 1 8 651 6 5 1	11駄	283 269 0 2 0	651 5 1
高永 4 年 下 高永 5 年 上	205 0 0 0 760 0 0 0	1	910 3 3 0		215 0 7 6 661 1 2 5	256 4 5 2 847 3 9 3		627.5 411 6 0 0	205 2 5 9 577 0 9 2
高永5年 下	944 0 0 0			50	417 6 2 2	317 6 0 6			303 1 2 6
系永6年 上系永6年 下	1,931 0 0 0 975 2 4 0	2	872 0 0 0	79	736 0 7 2 373 1 7 4	818 2 9 8 335 8 2 8		1,855 0 0 0 0	558 7 9 7 276 2 0 3
で 政元年 上 で 政元年 下	2,304 2 4 0 135 3 2 0	1	.,374 5分	1,321	830 8 9 7 1, 390 9 5 8	,015 9 7 9 448 1 8 0		733 0 0 0 0	639 9 6 5 274 7 8
₹政2年 上 ₹政2年 下	829 3 2 0 1,198 0 0 0		549 5分	58	830 5 7 1 1, 329 3 6 4	,071 3 6 3 480 3 1 3		1,564 0 0 0 0	615 3 7 0 252 6 8 3
政3年上	1,614 0 0 0 190 0 0 0	220	500 0 0 0	48	798 9 4 7 1,			1,079.5 0 0 0 0	584 0 2 205 3 4
改4年上	835 0 0 0	74	496 0 0 0	177	719 1 2 3 1,	,036 5 7 6		1,375 678 9 8 7	548 3 3 0
₹政4年 下 ₹政5年 上	705 3 0 0 1,058 3 0 0	1	716 2 4 0	89	249 7 9 2 764 8 6 5	348 4 6 2 914 8 7 7		↓以下「酒味醂」として 1,531.5 650 3 9 2	181 5 6 5 575 3 2 2
改5年下	307 0 0 0 565 0 0 0		520 0 5 8	34	249 7 9 2 ; 711 9 1 4 ;	257 8 1 7 8 857 2 2 7		↓以下「酒味醂」として 1,517 708 6 4 6	181 5 6 433 9 1
安政6年 下	390 0 0 0 959 0 0 0		. 229 0 0 0	18	260 2 5 6 673 3 3 0	957 1 1 2	40樽	↓以下「諸白味醂」として 1,355 806 9 9 3	165 0 3 6 389 8 9 8
万延元年 下 次久元年 上	585 0 0 0	61	,711 0 0 0		255 8 1 2	273 3 7 8	13樽	,	188 1 9 8
大元年 下	005 0 0	51俵1斗5升		40	359 4 3 6	392 7 9 2	13得	,	249 3 8 2
工久2年 上 工久2年 下	967 0 0 0 78 0 0 0		449 0 0 0	112	776 2 3 8 277 5 3 1	969 3 9 9 528 7 7 1		2,846.5 959 0 3 0 ↓以下「諸白」として	571 5 4 258 0 2
C久3年 上 C久3年 下	150 0 0 0 105 0 0 0		303 0 0 0	28		,000 8 0 5 423 1 4 0	32樽	3, 103. 5 1, 144 4 6 0	497 4 2 ( 453 3 6 (
元治元年 上 元治元年 下	245 0 0 0	i — i	317 0 0 0	130	434 0 7 9	453 4 8 4		1,994 1,130 0 1 2	256 0 8 8
を応元年 上	416 0 0 0 97 1 5 0	14	535 0 0 0	12		,095 3 6 8 474 1 2 7		1,888.5 788 7 9 8	535 3 1 9 198 0 2 9
慶応元年 下 慶応2年 上	230 1 5 0	65	413 0 0 0	33	711 6 0 1	928 7 0 1		1,058.5 576 5 9 2	376 3 1 6
E応2年 下 E応3年 上	205 0 5 0 771 1 2 0	33	296 0 0 0	133	309 2 4 3 574 3 2 7	272 9 9 9 576 4 2 4		914.5 466 7 5 8	199 5 4 5 426 4 1 7
慶応3年 下 月治元年 上	250.5 0 0 0 711.5 0 0 0	蔵米58 内米3 餅米10	537 0 0 0	163	116 6 3 1 518 0 5 0	234 1 1 1 684 7 5 2		619.5 147 4 0 9	171 1 9 3 433 4 4 7
用治元年 下 用治2年 上	424 0 0 0 883 8 0 0	米251 餅米25	303 0 0 0	164 220	274 7 8 4 497 3 4 4	334 2 3 6 508 5 4 6		1,163.5 221 3 4 5 1,274.5 444 9 5 1	189 1 4 348 2 1
用治2年 下 用治3年 上	199俵2石 5 8 0	11	23 0 0 0		243 7 6 0	224 2 3 8			248 5 6 0
月治3年 下	453 8 8 5 198 7 5 0	米5 糯米10		22	498 0 6 4 1 253 4 7 9	519 9 9 0 393 6 9 8		791 630 1 3 7	455 7 0 3 228 4 1 9
明治4年 上 明治4年 下	157 0 0 0	米128 糯米14 米62 糯米8	44 0 0 0	2	558 3 1 2 353 8 1 9	714 6 8 0 391 7 2 2		1,239.5 690 9 0 3	393 9 9 7 200 1 8 5
月治5年 上		米126 白米198 糯米8	i		807 0 1 8	885 4 4 0	_	h完細見帳 「伊豆店勘完細	349 0 2 8

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘 定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

醤油					焼酎					豆				
御殿場酒店		伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原店	御殿場酒店	1	伊豆/	吉	- 1	沼津店
樽	樽	石斗升合	樽	石斗升合	石斗升合			俵 斗 升	俵	俵	斗	升	合	俵
=	(3,654	57 3 9 6)		2 5 0 7			_			(185	0	0	0)	
				5 6 8 9 33 3 2 1			_	139 0 0					-	_
=		486 3 6 2		4 5 7 8 27 0 4 4				37 1 0		140	0	0	0	
= $ $	4,557	173 7 2 0		1 8 4 5 8 4 6 0			_	100 2 0		199	0	0	0	_
532 1,540		376 7 8 4		21 2 6 0	2 1 5 19 9 7 8		_	435 2 5						_
220 822	4,326	7分8厘00		2 6 1 3 17 6 0 4	3 4 4 0 37 1 4 6			142 0 0 266 0 0		222	0	0	0	
362 1,281	-,	433 6 0 1	! ! !	11 2 3 3 33 3 4 9	2 9 0		_	33 0 0 71 0 9	38	36	0	0	0	
269 651		513 0 0 6		19 3 9 5 41 1 1 6	9 1 7		_	853 2 5 105 3 5	00	76	0	0	0	
297 509	4,212	0 0 0 0		2 5 1 0 45 9 5 4	11 2 7 7 31 0 9 5		_	7 0 0 904 0 0		214	0	0	0	_
82 341	5, 548			12 0 3 3 54 3 9 9	2 7 9		_	159 0 0 354 0 0		120	3	6	0	
267				17 8 9 7	9 2 1 6			170 0 0 292 1 0			2		0	
508 197	4,646	98 6 7 8		16 0 9 5	7 2 4 7		_	50 0 0		173		0	i	
478 142	5,737	119 5 0 0	(38)	54 0 5 7 31 4 7 9	34 4 0 3 6 8 3 5			66 0 0 45 0 0		20	0	0	0	(16)
340 72	5,682	100 4 9 0	(38)	58 2 0 6 1 9 9 1 4	50 8 2 4 2 5 0 9			167 0 0 123 0 0		25	0	0	0	(214) (90)
209 110	6,912	99俵 6 5 7	(38)	61 7 3 0 11 7 5 3	30 2 2 9 7 4 5			188 0 0 83 2 0	=0	34	1	1	7	(104)
271 170	8,547	133 8 2 3		56 2 5 6 6 9 9 4	36 0 0 8 1 2 8 6		_	292 2 0 63 0 0	76	99	2	4	5	
428 266	9,888	142 4 4 1		56 1 1 2 9 3 1 1	34 2 5 7 7 5 3		_	240 0 0 193 0 0	12	46	2	4	2	
595 80	9, 117	118 1 3 2		53 4 7 1	35 0 1 6 6 4 6		_	358 0 0		41	0	5	3	
288 145	9,572	121 8 6 1	213	61 0 1 5	23 5 1 2 6 9 3			145 0 0 33 0 0		94	1	0	3	
399 140	12, 795	0 0 0 0	221	83 1 0 9 18 1 2 0	42 7 5 3 6 8 0			178 0 0 202 0 0	174	81	2	2	0	
360 155	10,477	0 0 0 0	162	68 0 1 8 13 1 1 5	30 9 9 7 4 5 8			291 0 0 84 3 5	4	43	0	0	0	200
423 206	12, 242. 5	0 0 0 0		67 7 2 7 17 5 5 2	38 2 5 3 6 9 0			174 3 5 29 0 0	4 136	51	3	8	7	563
	12,052	8分	112	67 6 0 2 18 9 4 2	39 1 6 3 1 8 2 7			114 2 0 23 0 0	266 9	17	0	0	9	46
	11,963	0 0 0 0	94	79 7 4 5 15 2 9 0	38 2 5 8 1 5 2 5			63 0 0 51 0 0	118	16	5	9	0	69
411 115			63	65 9 4 3 13 0 6 0	36 5 9 3 2 7 3			87 2 0 128 0 0	316 20					237
174	8,454	0 0 0 0	16		33 9 7 4			328 0 0 128 0 0	152	229	2	7	1	642
	9,211	8分	6	64 4 4 8 9 9 3 5	31 8 1 3			256 0 0	44	50	2	4	2	
	11,747	0 0 0 0	19	45 1 5 9 6 4 0 0	34 1 3 3 1 5 0 0			227 2 0 313 2 1	7	98	0	0	0	
52	11,725	8分	14					313 2 1		14.5	0	0	0	
	12,542	8分	118	32 7 9 5	1 0 1 27 3 5 8			177 1 0	70 73	86	0	0	0	422
	11,035	0 0 0 0	18	11 9 6 6 1 49 8 0 1	27 8 8 6			27 0 0 82 0 0	205 205	7	0	0	0	156
168	11,847	0 0 0 0	133	11 8 7 5	1 4 6			13 2 4	6	42	2	5	0	150
105 170	10,322	0 0 0 0	95	8 1 8 0 58 5 8 4	2 2 5 24 6 4 5			5 0 0		18	0	0	0	13
43 48	9,088	8分 9厘	87	5 1 7 5 35 8 5 4	1 4 0 21 4 6 5			14 0 0 24 0 0	10	5	0	0	0	2
28 89	9,256	6分 5厘	33	3 1 5 0 21 4 2 7	1 2 0 0 8 6 1 4			293 0 0 414 0 0	113	125	0	0	0	72
169 289	10,260	0 0 0 0	3	33 3 3 0	1 5 0 20 5 6 9			3 1 0 21 0 0	281					441
125 285	9,947	5分 0 0 0	7 25	2 8 0 0 35 7 7 3	23 0 0 1			17 0 0 63 0 0		10	1	0	0	446 73
94 201	7,816	2分 6厘	8	3 0 7 0 28 7 8 8	1 3 9 4 18 5 5 6			5 0 0						
450 781	8,396	9分 3厘	48	3 4 7 8 41 0 6 0	19 9 4 0			1 0 0 134 0 0	2	105	0	0	0	103
348	0,000	J, 0.E	. 10	12 0 4 9 62 1 5 1	2 7 0 0 36 2 1 6			6 0 0	2	100	,	,		100

(註) ――は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。( ) は譲渡以前の伊豆店、沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。

表 3. 出店売高(続)

茲り.		5元高(7	称元)														
			, ·	小麦				粉	糠	,			酢		,		r
会計年	期	小田原店	御酒店	伊	豆店	沼津店	小田原	御酒店	伊豆店	沼津店	小田原店		御殿場酒店	伊豆店	沼津店	小田原	御酒店
						_i			D 35/G	1017/0		i		1			
マル 4 左	-	俵 斗 升	1	俵 -	斗升台	ま 俵	俵	俵		1	石斗升	合	石斗升台	樽	樽	(粕糠)樽	俵
天保4年天保5年			!	(5 (	0 0	\ <u></u>				!		_		(15)	!		
天保5年		55 0 0	!	(3 (	, , ,	′! —				!				(10)	!		
天保6年	上		i —			-				i —		- 1		_	i		
天保6年			i							i		- 1			i —		
天保7年		04.0.0	-	62 (	) () (	) ; —				-				35			
天保7年天保8年		94 0 0		85 (	) () (	. :						- 1		4			
天保8年			1		, , ,	´		- 粉糠91.5糠34	:	:		- ;	18 0 0		!		!
天保9年	上	40 1 6	1	141 (	) () (	)		糠167.5		i —		- 1		0 3	i —		干粕224.5
天保9年		50 0 0	1			; —		粉糠8		; —		- 1		0;			17
天保10年 天保10年		71 0 0 9 0 0	1	45 (	) () (	) :		糠61 糠105		:		- 1		0; 6 0:			180
天保11年		52 3 2	1	206 (	0 (	) <del> </del>		糠103	:	!		- 1		0: 9	!		255.5
天保11年		100 0 0	i !			[ —		粉糠165		!				0	!		49
天保12年		7 0 0	i !	47 (	) () (	)		糠165		:		- 1		0 18	!		185
天保12年 天保13年		$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	1	226 (		,		粉糠182		. —		- 1		0¦ 0: 18	i —		395
天保13年		142 0 0	į	236 (	) () (	'! $=$		: 糠191 : 糠40						0; 18 0;	=		5
天保14年		148 0 0	1	151 1	3 (	) -		糠99		:			62 4 0		!		262.5
天保14年	下	34 0 0	i 1			<u> </u>		糠177.5		:			20樽37石 9 0	0	i —		250
弘化元年		91 0 0	i !	197 (	) () (	)		糠189.5		. —			20樽69石 7 0		. —		266
弘化元年 弘化2年		76 0 0 85 0 0		202 (	) ()			: 糠162 : 糠174	:				25 6 0 60 4 0	0; 0; 19			331 337
弘化2年		69 0 0		202	, , ,			糠164		(37)		i i		0	(160)		336
弘化3年	上	167 0 0		69 (	) () (	)		糠176	:	į		-	57 3 0	0 22	(395)		338
弘化3年		29 0 0	1	05.1				糠191		(39)		- 1		0	(250)		35
弘化4年 弘化4年		37 2 5 26 0 0		25 1	9 (	' <u> </u>		: 糠196 :粉糠158				- 1	51 5 0 18 3 0		(551)		293
嘉永元年		58 3 1	į	4 (	0 (	) <del> </del> —		糠158		i		į		36	i —		241
嘉永元年		2 0 0						粉糠3		:				0	!		
嘉永2年 嘉永2年		4 0 0 12 0 0	1	113 (	) () (	) i		糠165 糠44	:	:		- 1		0¦ 36 0!	!		343
嘉永3年		12 0 0	1	376	0 (	)		糠187	:	!		- 1	94 3 0		!		272
嘉永3年			1					糠■		i —		- }		0	i —		
嘉永4年 嘉永4年		12 0 0 12 0 0	1	89 2	2 2 (	) ;		糠142 糠140		1		- 1		0; 50	346		251
嘉永5年		10 0 0	1	317 1	1 (	, :		糠143		1		- 1		0; 0: 57	597		282.5
嘉永5年	下	106 0 0						糠11					40 0 0	0			8
嘉永6年		144 3 0						糠186				- 1	131 5 0		463		222
嘉永6年 安政元年		2 0 0 140 1 0	į	411 5	4			: 糠199 : 糠199		į		į	49 0 0 147 7 5		541		干粕54 264
安政元年		190 0 0		111 0	//			糠190					48 9 0		011		30
安政2年		258 0 0		56 (	6 9	9		糠193					129 0 5		553		297
安政2年 安政3年		$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	1	238 (	) () (	. !		粉糠170 糠174		1		- 1	50 3 0 145 4 1	0; 0; 43	1		干粕20 282
安政3年		3 0 0	1	230 (	, , ,	' <u> </u>		糠209		1			66 9 0		1		生粕19
安政4年	上	0 0 0	1			100		糠217		1			159 1 0		555		255
安政4年		5 0 0	1	=00				糠185		1		- 1	36 0 0				28
安政5年 安政5年		227 0 0 5 0 0	1	509 (	) () (	) <u> </u>		糠196 糠136		1		- 1		0; 34 0;	465		220 64
安政6年		50 0 0	1	181 1	6 2	2		糠136		1		- 1		5 101	452		235
安政6年			1			;			:	1		i		1	1		! !
万延元年		107 0 0	1	110 1	0 (	)   110		糠169		1		- 1	203 1 8 67 6 7		602		237
万延元年 文久元年		11 2 0	·	1 (	0 (	) !		糠167		į		_	67 6 7	117	628		24
文久元年	下							粉糠213					88 8 5	0			6
文久2年		24 0 0		40 (	0 (	)		糠214					273 3 5		812		278
文久2年文久3年		2 0 0 64 0 0		191 (	0 (		30 30						114 7 0 270 8 0		767		生粕33 260
文久3年		12 0 0	1	161 (	, , ,	1	30	糠242		1			104 0 0		101		211
元治元年	上		:	65 (	) () (	)				i 1		-		345	839		
元治元年		101 0 0	1	07 6			50	粉糠236	:	1			92 6 0		607		干粕65
慶応元年 慶応元年		118 0 0	1	01 (	) () (	<b>'</b>	26	糠256 糠164		1			217 7 5 89 6 0		687		261 生粕26
慶応2年	上	12 0 0	1	147 (	0 (	)	26			1		į	169 1 0	0; 285	591		生粕26
慶応2年		190 2 0		<u>.</u>			7	粉糠63		1		- 1	41 9 0				T-00-1
慶応3年 慶応3年		229.5 0 0 1 0 0		51 (	) () (	'	15		:	1	18 9 8	0	107 7 0 63 5 5		724		干粕114
慶応3年 明治元年		39 0 0				麦2		粉糠165	:	1	54 1 5		157 4 5		225		干粕215
明治元年	下		1			~2	25	粉糠39		1		5	80 5 0	0	433		50
明治2年		23 0 0	1					粉糠133	!	1	20. 6. 4	.	166 7 0		1,117	干粕134	干生粕167
明治2年 明治3年		1.5 0 0	1				12	粉糠91 粉糠93		1	20 6 4 24 9 8		35 6 0 126 2 0		1 381		18 干生粕95
明治3年	下	1.000					43	163粉糠			27 7 7		71 7 0		1,001		干粕37生粕22
明治4年	上		1			2	43	170粉糠		1	706 7 0	1	163 7 0	0:305樽7分5厘	1,170		生干粕172
明治4年		30 0 0 34 2 0						170粉糠			24 1 0 80 6 2	9 5	62 5 0 176 1 0		i		干粕3生粕55 干約161件約55
明治5年				- ///- FIN				195粉糠		<u> </u>		_	170 I U    野場店勘完細貝		<u> </u>		干粕161生粕55

(出所) 天保5年「伊豆店勘定帳」(御殿場市立図書館所蔵)。それ以外は各年「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘 定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

	粕				ţ	H.				味噌						味	・林・			
自	■豆店		沼津店	小田原	御酒店	伊豆店	沼津店	小田原	御酒店	伊豆	店	沼津店	小田原	御酒店	伊	豆店		Ŷ	召津店	
俵	貫	匁	俵/樽	俵	俵	俵	俵			貫	匆	貫	駄	樽	樽	斗 升	十合	樽/駄	石斗	升 合
(226	0	0)			_	(153)				(3樽0	0)	-						: =		
-												=					_	!		
353	0	0				180	_			4樽2	910	_		_						
1	2,030	700			_	280	_		_	-1.0 -		<u> </u>		_				<u> </u>		
1				_	753		—			01	700	-								
81	769	800			2,061	383				21	700	_								
106	258	1			1,446.50 250	210				m126.10	400	_								
181	93	250			1,769 556	714				7樽46	400	!								
297	282	80			1,531 1,059	319.5				3樽72	380	-			4	0	0 0	! ==		
320	221	500			1,764.50 264	291				5樽51	800	=	3		2	0	0 0			
325	197	800			1,009 810	294	_			211	340	!			5	1	1 5	!		
343	153	590			2,630 1,373	226	_			159	590	<u> </u>			24	2	9 5			
327	191	200			3,627 1,579	311	791			301	340	(4)			4	0	8 0			
290	666	200	(112俵 下り粕19樽)		3,801	(301.5)	2,194			640	130	(7)			2	0	0 0			
415	0	0	(5樽) (干粕55俵 下り粕7樽)			(366.5)	1,360 879			643	34	(6) (4)	2		1	1	4 0	(2樽)		
486	5分	0				483俵5分				1,266	900	i	2		1	0	0 0	<u> </u>		
455	0	0			1,833 2,677	612.5				1,432	620	-						:		
548	5	200			1,501 3,711	749				1,817	760	=								
599	5	700			1, 194 4, 206	633				1,449	800							!		
664	12	500			1,015 2,763	448				1,703	870							i ! !		
539	0	0			633 1,669	818	183			1,881	0	ĺ			! ! !			! ! !		
637	0	0			940	1,078				2,381	800	1		2	:			1 1 1		
					492							;		2				! ! !		
563	3	900	#/ 000 Hz		2, 130 1, 201					2,412	190	1						i ! !		
671	0	0	粕230俵		2,937 1,018	1,043	55			2,271	800							! ! !		
			干粕253俵		3,303 957													i 		
452.5	0	0	干粕214俵		3, 792 698	824	726			1,749	30							↓以下「ⅰ	酉味醂」	として
456	0	0			2,289	653	2,313			2,520	300	1			:			1,517駄 ↓以下「『		
446	0	0			3,402 751	1,533	1,015			2,691	500			21				34樽	0 0	
353	0	0		_	815	539	18			1,935	0	1		—				51樽	0 0	0 0
407	0	0	粕236俵		1,960	685	100			2,053	0							99樽	0 0	0 0
427	0	0	干粕224俵	-t-1700	1,418 2,403		556			2, 163	0	1			!			!		
415	0	0	干粕101俵	才田36		543	231		—	2,113	0									
343	0	0	干粕180俵		187 838	394	1,540			2,240	50	1						!		
262	0	0	干粕63俵		461 837	2, 148	652			1,328	108		9斗 9斗		1	0	0 0	11樽		
203	0	0	干粕72俵	斉田186	454 867	512	56			1,297	360	1			!			2樽		
297	0	0	1 10.200		251 1,083		1,130			1,518	55	ĺ								
352	67	100			738 1,097		2,321 1,524			2,117	345	į						小樽4ツ		
1					784															
211	0	0	شده سد		1,389	395	538			886	76	:			!			小樽6ツ		
161駄	1分		粕2樽		7,333 1,601		1,096			725	720	28						小樽11樽		
(註)			たいことを示す.	3				ار خردیا: ایر خردیا:				<u> </u>	の伊豆店			- total V		<u> </u>		

<sup>(</sup>註) — は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。( ) は譲渡以前の伊豆店, 沼津店の帳簿から抽出した数値を示す。■ は虫損を示す。

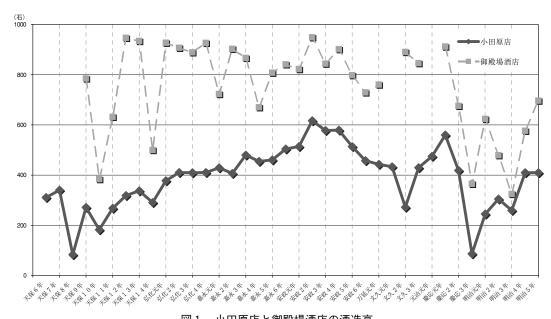


図1. 小田原店と御殿場酒店の酒造高

(出所)「小田原店勘定細見帳|「御殿場酒店勘定細見帳|(近江日野商人館所蔵)。

融資産の部では嘉永5年上期に15両1分ト10匁9分3厘,塩250俵「郡内方々へ預ケ分」とあり、安政元年(1854)上期には210匁4分6厘「塩郡内ニ預ケ」61俵、また、安政2年下期は14両3分ト11匁「郡内方々預ケ塩取合」224俵などの記述から、郡内地域と塩の取引のあったことが推察される。嘉永期までは小田原店よいは伊豆店から醤油を買入れていることが多い。米は「本店買入米」と「⑪店買入」とがある。どちらの買入米もあくまで酒造用および飯米としての買入れであり、米の販売は殆ど行っていない点が小田原店と異なる。酢を継続して販売しており、小田原店や沼津町店から仕入れている時もある10。本店とは酒代諸色代の貸し借りがある20。

## ②小田原 (大)店

文化3年に幕府による「酒造勝手造り令」が 発布された翌年、日野屋は相模関本に 甲酒造 店を出した。関本村は矢倉沢往還の宿場的な性 格をもった村である。開店の経緯は、本店支配 人である多兵衛, 平兵衛, 宗助, 宗兵衛差出, 日野屋兵右衛門宛,文化9年正月「闸酒店要 用控」に次のように記されている。 ——〈関本 村伝蔵が所持する99石の酒株、居屋鋪、蔵、諸 道具を、期間15年、借料年3両で借り受け、ま た同村、角兵衛所持の居屋鋪を期間15年で借り 受け, 地代を年に金2分払う。関本店を御殿場 本店の「附店」とし、「歩持」は御殿場本店支 配人で構成される。「歩持」が御殿場本店から 退店する際や、老年による退店の際は、関本店 の経営からも退く。建物普請,諸道具,諸入用 金が必要な際は、借用土臺金として本家から借 り、年1割の利息を払う。年々の酒造元手金は 御殿場本店から借用し、土臺金同様、年1割の 利息を払う。本家、本店以外の外部からの借 金,及び「歩持者」の匣店への貸付けを禁止

<sup>19</sup> 天保11年上期, 天保13年上期, 天保14年下期。

<sup>&</sup>lt;sup>20</sup> 天保10年下期,天保13年下期,天保14年下期,弘化 3年下期,嘉永4年下期の「併店諸色かりメ」や, 弘化3年下期,安政2年下期の「併酒諸品代かし」 など。

する〉。

また,関本から小田原への移設については, 文政2年7月「(田酒店場所かへの件ニ付)<sup>21</sup>」 によると以下の理由があげられている。—— 〈店の不勘定,善兵衛(店員)の一件,屋敷が せまく元来角兵衛および伝蔵からの借用で,関 本村内か小田原あたりの適当な屋敷に引越しを 希望する〉。

このようにして、文政2年に小田原城下に近い池上村に店を移し金店と称するようになった。 匣店の設置および小田原へ移設した文化から文政期は、『小田原市史』によれば、酒株譲渡や新規酒造開業者が小田原地域に続出した時期である<sup>22</sup>。

小田原店の主力商品は、酒、醬油、米、大豆、小麦、焼酎である。酒は醸造しているだけでなく、買入れもしている。地酒、下り酒などを仕入れており、御殿場酒店から買入れている場合もある<sup>23</sup>。大豆、小麦など醬油原材料品は仕入れだけでなく販売もしており、地域の需要に応える側面をもつとみられる。醤油醸造を同じく営んでいた伊豆店よりも大豆の売高が多い。

小田原店の売高で注目されるのは、米の販売量が極めて多い点である。小田原店と同様に酒造業を営む御殿場酒店の米の買入高と比較しても、小田原店の米取扱いは際立っていることがわかる。天保9年上期から明治5年上期の米買入実数をみると、小田原店は御殿場酒店よりも概ね上回っている。ところが酒造高でみると、先述したように御殿場酒店のほうが小田原店よりも2倍あるいはそれ以上の酒を造っている。すなわち小田原店において、米は、酒造および自家消費用のためにのみ買入れているわけではなく、販売商品としても扱われていたといえる。実際、小田原店における米の売高は、御殿

場酒店,伊豆店,沼津店と比しても他店を圧倒している。米は小田原店の主力商品の一つであったわけである。なお,小田原店では,御殿場酒店同様,焼酎の買入れと販売も行っており,買高,売高ともに,小田原店のほうが御殿場酒店より勝っている。

大量の米の仕入れ先について「覚」における 米の記載から確認すると、小田原店は蔵米がか なり多い。しかし他店では蔵米の他にも遠隔地 米の取引があったことがわかる<sup>24</sup>。

#### 蔵米・遠隔地米の買入

 小田原店
 蔵米
 田代米
 土肥米

 御殿場酒店
 蔵米
 長門米
 加賀米
 膳所米

 伊豆店
 蔵米
 長門米
 加賀米
 膳所米

 水野米
 駿東米
 下り米

 沼津店
 蔵米
 長門米
 水野米
 伊州米

小田原店で、遠隔地米よりも蔵米の記述が圧倒的に多いということは、小田原藩との結びつきの強さを示している。嘉永5年下期から明治4年上期の「覚」における金融資産の項では、一貫して50両が御用達金あるいは用達金として計上されている。本店の文久元年「店勘定細見帳」には「御用金之覚」の項があり、総額5,632両ト14匁5分にのぼっている。なお、日野屋忠助(三代目兵右衛門)は、文化14年に小田原藩から二人扶持を与えられ<sup>25</sup>、天保9年には名字帯刀を許されている<sup>26</sup>。これらは日野屋の御用商人としての地位の確立を物語るものといえる。小田原店の経営動向については4章および

 国名
 港名 (川名)
 河川の「川港」

 駿河
 岩淵 (富士川)
 鰍沢(岩淵は御城米のみ)

 相模
 須賀 (相模川)
 厚木

<sup>21</sup> 近江日野商人館所蔵。

<sup>22 『</sup>小田原市史』通史編近世 (1999), 489頁。

<sup>23</sup> 天保9年下期など。

<sup>&</sup>lt;sup>24</sup> 鈴木直二は、地方米国市場としての米穀積出港に着目し、駿河および相模の港および川港について次のように列挙している(鈴木直二(1977)、713頁)。

<sup>\*</sup> 文化14年7月9日「(冥加金差上等奇特に付其身一代 二人分下し置かれるに付)」(近江日野商人館所蔵)。

<sup>&</sup>lt;sup>26</sup> 天保9年11月18日「(実意の取斗により苗字脇差免に 付)」(近江日野商人館所蔵)。

5章で詳細に論じることにする。

## ③伊豆 太店

分家の山中与兵衛が天保7年10月に本家に譲渡した委細については、同年の「譲渡申証文之事(日野屋太三郎建物等譲渡ニ付)²²」によると、屋敷一カ所、醤油蔵二カ所、醤油道具すべて、穀蔵一カ所、古雑蔵一カ所、質物蔵一カ所、店建物一カ所、諸道具が金1,638両2分2朱で譲渡された。 ⑤店と称する伊豆店は、年一回の決算を行っている。弘化2年(1845)には「訳書」があるが、その他の年にはない。すなわち弘化元年までは仕入高が不明であり、帳簿としては不完全な面がある。嘉永5年から明治4年は「仕入高」として仕入合計金額があげられているが、その内訳は嘉永5年、嘉永6年をのぞき記述がない。

伊豆店は醤油醸造店であるが、醤油の他に、 米、大豆、小麦、酢、粕、塩などを販売してい る。醤油は嘉永期、安政期に売上が増大し、万 延以降ゆるやかに減少している。

小麦の売高は小田原店を概ね上まわるが、大豆の売高は小田原店より低い。地大豆とともに御殿場地方の特産品である御厨大豆の取扱いのあったことが、「覚」の在庫記載から確認できる。小麦は「一店へ小麦代かし」として安政6年に81両余、慶応2年(1866)に「小麦残代店かしメ」として195両余が計上されている。

粕の売高は弘化4年以降,御殿場酒店を常に 凌駕している。また,粕は小田原店では販売さ れていない。

酒の売高は天保8年~11年,嘉永4年,万延元年(1860)~文久元年,文久3年に確認できるが,そのほかの年では見られず,焼酎については扱いが全くない。酒類は恒常的な取扱商品ではなかったといえる。

沼津店ほどの量ではないが,一貫して酢を

他店では取扱いがなく、伊豆店でのみ販売されている特徴的な商品として、天保から嘉永期の古着販売、天保から文久期の成茶販売、嘉永期以降の鉄販売が注目される。味噌の販売も伊豆店での取扱いが目立ち、その売高は万延元年がピークで2,600貫を超えている。他店との取引を示す記述がほとんどみられないが、安政2年には「 住店味噌代ぶん」として1両ト3分2厘の貸しがある。

## ④沼津 阡 店

沼津店は二代目兵右衛門が明和7年(1770) に沼津に創設した店舗で、次男与兵衛の分家に際して譲渡され、当初 町店と称していた。だが伊豆店同様、経営の行き詰まりから、嘉永元年に「一札(家屋敷諸株質入売払の儀付)」が与兵衛、定次郎から兵右衛門に差し出され、本家に引き取られることとなり、嘉永3年に380両で屋敷が買取られた。翌4年に建物、器具、土地あわせて1,034両2朱で譲渡され、町店は町店と改称した<sup>28</sup>。嘉永7年(安政元年)には日野屋和平に名義替えとなっている<sup>29</sup>。 町は年二回決算であったが、町は明治元年をのぞき年一回決算である。

町店の前身である 町店では、「覚」に「手酒」があるので<sup>30</sup>、自家醸造を行っていたとみられる。一方で、遠州酒を弘化3年上期に15石8 斗7升2合、弘化3年下期に20石3斗2合買

売っている。有物の記述から、尾張の働酢を 扱っていることがわかる。 働酢は特に沼津店 での取扱いが豊富なので、そちらで詳述する。

<sup>&</sup>lt;sup>28</sup> 『山中兵右衛門商店二百五十年史』上(1976), 62 百.

<sup>&</sup>lt;sup>29</sup> 嘉永3年3月「譲渡屋敷証文之事」(近江日野商人館 所蔵)。他に嘉永7年(安政元年)の史料に「[酒造 稼を和平に譲たき願状]」(近江日野商人館所蔵) や,嘉永7年6月「乍恐以書付奉願上候(酒造鑑 札)」(近江日野商人館所蔵)などがあり,酒造高50 石が御厨御殿場村忠助から沼津宿上土町和平に譲渡 されている。

<sup>&</sup>lt;sup>30</sup> 弘化2年下期152石, 弘化3年下期292石4斗, 弘化4年上期154石。

<sup>27</sup> 近江日野商人館所蔵。

入れたり、弘化2年下期には (11) 店から地酒を 買入れてもいる<sup>31</sup>。下り酒では弘化3年下期の 「覚」に、新伊丹16駄、灘酒買入もの2駄半な どが見られ、多種の下り酒を扱っている。

所店における酒の売高実数でみると、小田原店や御殿場酒店を上回るほどの量があったわけではない。 阡店の酒取扱いで他店と異なる点は、諸白に力点がおかれている点である。特に文久3年以降は例外なく諸白と明記されている。先に述べたように、「覚」における酒銘柄でも灘酒などの下り酒の記載が多く見られる。他にも江戸酒、地酒の銘柄記述が、他店に比して多種で豊富である点も特徴的である。 阡店は醸造というより酒の仕入れと販売に重点を置いているといえる。全体を通じてみれば、 阡店の主力販売品は、諸白、酢、塩、大豆、醤油

であるといえる。

焼酎は明治期になり買入れがあるが、それ以外の時期においては買入れ、販売ともにない。 米の買入れが小田原店、御殿場酒店に比して極めて少ない。醤油の買高、売高は嘉永から安政期にかけて減少し、文久期以降は一定しないが概ね減少傾向にある。

小田原店同様、酢の買入れがあり、その量は 小田原店より常に多い。 田店時代も 田店に なってからも、「覚」における酢の在庫として 働印が極めて頻繁に記載されていることが注 目される。尾張産の酢には 働の樽印が使われ ていたため、酢の仕入先として尾張があげられ る。 働の印は近世期の尾張において複数の酢 醸造家、たとえば半田の中野又左衛門家<sup>32</sup>や名 古屋の笹田伝左衛門家<sup>33</sup>が使用していた。山中

表 4. 出店売上高

会計年	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店
	両.分.朱 匁.	両.分.朱 匁.	両.分.朱 匁.	両.分.朱 匁.
嘉永4年	4,468.1.0 8.8 6	2,238.1.0 8.3 9	2,117.2.0 10.0 0	1,610.3.0 14.7 1
嘉永5年	3,817.1.0 5.4 8	2,417.1.0 3.04	2,355.3.0 0.00	2,560.1.0 5.5 0
嘉永6年	5,515.3.0 8.3 0	2,469.3.0 11.9 8	1,969.1.0 7.1 6	3,285.3.0 2.00
安政元年	4,573.3.0 12.4 0	2,698.2.2 3.4 9	2,663.1.0 11.3 6	4,428.3.0 3.1 2
安政2年	4,040.0.0 12.0 6	3,031.2.0 8.0 9	1,868.0.0 5.3 8	5, 164. 2. 0 4. 8 3
安政3年	3,803.0.0 11.2 3	2,898.0.0 1.5 1	1,917.2.0 13.9 4	4,225.2.1 1.9 0
安政4年	3,535.0.0 2.3 1	2,794.3.0 5.4 4	1,715.1.0 4.02	4,468.2.3 1.0 0
安政5年	4, 189. 0. 0 14. 7 2	3,053.0.0 12.6 8	1,965.3.0 10.6 1	5,055.1.0 13.5 9
安政6年	3,640.2.0 11.4 0	2,787.0.0 14.0 0	1,769.3.0 1.5 0	5,376.0.2 1.7 5
万延元年	4,059.2.0 13.9 0	3,457.1.0 29.4 9	3,314.3.0 6.2 7	5,660.3.0 12.9 4
万延2年	<del></del>		3,668.3.0 0.5 1	6,421.1.0 8.2 9
文久2年	4,601.0.0 13.3 4	3,766.2.0 4.4.2	2,249.1.0 3.8 0	9,806.0.0 14.0 6
文久3年	4,498.3.0 4.1 3	4,467.3.0 10.7 3	2,415.2.0 2.64	10,902.3.0 1.5 6
元治元年			2,939.2.2 1.2 0	9,553.1.2 1.6 2
慶応元年	7, 262. 1. 0 8. 5 0	5,657.0.0 7.08	3,722.0.0 8.3 8	11,437.2.0 4.2 0
慶応2年	7,665.0.0 13.0 7	6,658.2.0 2.4 0	4,587.1.0 0.8 4	12, 128. 1 . 0   8. 9 4
慶応3年	13,640.2.0 10.6 1	7,637.2.0 9.6 3	4,981.2.0 13.0 5	15,582.1.0 1.1 2
明治元年	9,996.0.0 1.4 2	7,169.3.0 6.7 3	5, 158. 2. 0 9. 6 4	12,691.3.0 0.3 6
明治2年	10,574.3.0 4.5 6	6,495.1.0 0.4 7	5,893.2.0 2.64	16,563.1.1 7.7 3
明治3年	10,485.1.0 2.9 2	8,459.1.0 8.7 7	4,660.2.0 14.1 1	18,947.2.0 4.3 9
明治4年	9,026.0.0 4.6 3	10,651.1.0 3.8 2	4,631.2.0 12.8 9	19,300.2.0 2.6 1
明治5年	7,759.3.0 2.4 5	8, 168. 2 . 0 5. 7 9		

(出所)「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。 (註) — は帳簿がないことを示す。

<sup>&</sup>lt;sup>31</sup> 売上差引の項に14石9斗4升6合「地酒⊕ ⑩ 5 買分 ヲ引」と記載がある。

<sup>∞</sup> 現ミツカングループ本社。

<sup>33</sup> 現マルカン酢株式会社。

家の文書には、作成年不詳ではあるが、酢屋又 左衛門、慶介差出し³4、日野屋和平、喜兵衛受 取りの「御約定申一札之事³5」に、「酢仕切之 儀」「酒仕切り之儀」などについて記された文 書が残っていることから、中野又左衛門家から 酢を買入れていたことを確認できる。沼津店と 中野家で取引があったことは、中野家の明治2 年の「大福帳」に、「沼津 日野屋和兵衛 計 780樽³6」が販売先の一つとして記載されている ことからも確認できる。それによると、この年 の日野屋への酢の販売銘柄は「なかの」が290 樽で、並酢が490樽である。同じく明治2年の 沼津店の「勘定細見帳」では、働酢を852樽買 入れている。

他店舗との関連記述をみると, 伊豆店から

「銭代かり」が安政2年より継続している。安政5年には、343両ト11匁7分9厘が「相州大豆698俵本店5かり」とあり、文久2年に10両の「⑪店大豆代かり」がある。

以上のように各店舗の取扱品目を見ていくことにより、山中家の出店が醸造業のみならず、 醸造品ならびにその他の諸品の販売業にも従事 していたことが明らかとなった。各店舗の収益 費用勘定から売上合計金額を示したものが〈表 4. 出店売上高〉で、売上総利益を示したのが 〈表5. 出店売上総利益〉である。これによれば、 沼津店の売上高が最も高くはあったものの、収 益は低かったことがわかる。次章以降では、小 田原店の経営活動に焦点を絞り分析する。

表 5. 出店売上総利益

会計年	小田原店	御殿場酒店	伊豆店	沼津店
	両.分.朱 匁.	両.分.朱 匁.	両.分.朱 匁.	両.分.朱 匁.
嘉永4年	1,495.0.0 1.2 7	547. 2. 0 11. 4 0		92. 2 . 0 8. 0 8
嘉永5年	1,662.1.0 9.8 6	836. 2. 0 11. 8 0	637. 1 . 0 9. 0 4	225. 0 . 0 7. 5 9
嘉永6年	1,982.1.0 6.7 0	835. 2 . 0 5. 7 4	492. 1 . 0 4. 2 0	435. 0 . 0 5. 4 3
安政元年	1,062.3.0 1.5 8	1, 183. 2. 0 5. 3 4	841. 1 . 0 7. 9 5	205. 0 . 0 6. 7 4
安政2年	1,302.0.0 0.8 3	1,376.3.0 2.1 9	492. 1 . 0 14. 8 6	398. 1 . 0   14. 3 3
安政3年	949. 0. 0 14. 2 5	959. 0 . 0 7. 4 6	535. 3. 0 2. 3 2	431. 2 . 0   3. 4 4
安政4年	1,517.2.0 0.2 2	964. 2. 0 4. 8 3	422. 2. 0 1. 3 6	620. 0 . 0 4. 5 4
安政5年	1,223.0.0 9.2 6	1,114.1.0 10.2 9	339. 1 . 0 13. 5 3	516. 3 . 0 1. 0 7
安政6年	1,374.1.0 7.8 6	1,201.0.0 14.4 6	396. 1 . 0 9. 4 2	443. 1 . 0   13. 7 3
万延元年	1,220.3.0 13.6 6	1,262.2.0 2.2 5	986. 2. 0 5. 9 8	556. 1 . 0 9. 5 4
文久元年			959. 2. 0 1. 2 0	107. 0 . 0 4. 6 6
文久2年	1,971.0.0 14.9 5	1,479.1.0 3.0 7	564. 2. 0 6. 2 7	596. 0 . 0 7. 6 9
文久3年	1,936.2.0 1.7 2	1,272.0.0 5.9 7	558. 0 . 0 9. 2 4	1,194.3.0 10.7 0
元治元年			1,033.3.0 1.9 9	466. 3 . 0   1. 8 7
慶應元年	3,402.3.0 2.08	2,645.3.0 7.58	1,337.3.0 2.5 5	1,156.3.0 2.7 6
慶應2年	2,767. 3. 0 13. 8 6	3,494.3.0 10.8 4	1,698.3.0 11.3 5	1,604.3.0 8.38
慶應3年	2,586.1.0 6.1 4	3,365.0.0 14.7 4	937. 0 . 0 10. 8 0	1,331.1.0 5.2 8
明治元年	4,021.1.0 3.4 3	1,721.0.0 4.6 1	1,325.0.0 4.3 4	925. 2 . 0   10. 5 6
明治2年	2,959.0.0 7.4 4	1,314.2.0 0.2 1	174. 3. 0 3. 2 1	107. 2. 0   13. 8 2
明治3年	3,782.1.0 8.2 3	2,616.1.0 12.9 5	1,866.3.0 9.99	193. 2. 0 3. 3 8
明治4年	1,749.0.0 14.7 4	3,831.1.0 6.2 3	564.3.0 1.8 7	839. 0 . 0   13. 0 0
明治5年	854.0.0 2.2 2	3,966.1.0 0.8 0		

(出所)「小田原店勘定細見帳」「御殿場店勘定細見帳」「伊豆店勘定細見帳」「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

<sup>(</sup>註) ――は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数値の記載がないことを示す。

<sup>34 「</sup>尾州半田」の捺印がある。

<sup>35</sup> 御殿場市立図書館所蔵。

<sup>\* 『</sup>中埜家文書にみる酢造りの歴史と文化』2 (1998), 資料28「江戸方面への酢の販売 (明治2年)」,64 頁。中埜又左衛門家の帳簿分析については曲田浩和 (2002)参照。

## 3 小田原店における勘定帳の構成と特徴

小田原店は秋(上期)と春(下期)の年二回 決算を一貫して行い「勘定細見帳」という決算 簿を作成している<sup>37</sup>。以下では天保10年上期を 例に、その記載内容を具体的に見ていくことに し、次に帳簿記載の特徴を検討する<sup>38</sup>。

## (1) 小田原店における勘定帳の構成

覚

- 一 金三拾弐両三分卜 八匁六分八厘 新酒廿五 七六 石 (1)
- 一 金四拾両壱分ト 七分九厘 元米諸味かし米 七六 三十石六斗 (2)
  - 一 金六両也 味噌九分目 (3)
  - 一 金弐分ト 壱匁五分八厘 酢弐樽 (4)
  - 金五百四拾三両壱分ト 五匁五分五厘 百四 十七ゟ百六十五迄メ 正油造り拾九本ト三百 石 (5)
  - 一 金五両也 同上之上ケ三石 (6)

六〇

一 金拾両也 同並拾石 (7)

石

- 一 金八拾八両壱分卜 六匁弐分 小麦百六拾五 七四七 俵 (8)
- 一 金壱両ト 六匁六分七厘 大豆弐俵也 (9) 七弐
- 一 金拾六両壱分ト 拾匁七分壱厘 裸麦四拾六 石壳式 俵 (10)
- 一 金弐拾三両卜 九匁四分七厘 小豆三拾三 五七 俵 (11)
- 一 金三両三分ト 八匁三分三厘 大麦五斗入十 石八 四俵 (12)
- ぶ 勘定帳の標題は必ずしも一定しておらず、特に天保期は様々である。天保4年下期「⑤店勘定帳」、天保5年下期「⑤店勘定細見扣」、天保6年上期「⑤店勘定細見帳」などがある。しかし天保10年下期以降は「勘定細見帳」と表記されることが多いので、本稿では便宜的に「勘定細見帳」とよぶことにする。
- \* 「天保十己亥十一月吉日(お店勘定目録」(近江日野商 人館所蔵)。行末の(数字)は引用者による。

- 一 金三両弐分ト 壱匁七分六厘 赤穂塩三拾 八五 俵 (13)
  - 一 金弐両三分ト 三匁 成茶弐本 (14)
- 一 金百五拾五両弐分卜 九匁六分弐厘 内米三 弐一弐 百三拾俵 (15)
- 一 金拾八両三分ト 七匁七厘 同四拾俵 内十 同断 九俵車四軒 廿一俵座ニあり (16)
- 一 金弐拾壱両ト 拾三匁五分八厘 同四拾五 同断 俵 但し白米四十弐俵分三七ニスル (17)
- 一 金弐拾四両弐分ト 壱匁七分 切手米五拾弐 同断 俵 (18)

十八口

メ 金九百九拾六両ト 九拾四匁七分壱厘 (19) 亥十一月廿日改

一 金四拾五両壱分壱朱ト 六分八厘 三貫六百 廿四文 方々時かし惣メ高 (20)

同断

- 一 金弐拾両三分ト 拾五貫八百拾五文 大家時 かし惣メ (21)
- 一 金拾両也 熊七殿□代預ケ (22)
- 一 金三拾六両三分ト 三匁三分六厘 ①店正油 かしメ (23)

九月ち

一 金百六両也 併店預ケメ (24)

十一月廿日改

一 金廿両弐分弐朱卜 百廿八貫百拾九文 店有 金残メ (25)

六口

金弐百三拾九両壱分三朱卜 四匁四厘百四拾七貫五百五拾八文

□七○ 此金廿壱両ト 四匁八分 (26)

弐口

✓ 金千弐百五拾六両壱分三朱ト 百三匁五分五 厘 (27)

内

- 一 金五百両也 元手金引 (28)
- 一 金弐百四拾四両ト 壱匁壱分壱厘 併店指引 メかり (29)

#### 十月二日分

一 金百五拾両也 同断かり (30)

#### 同十九日分

一 金弐両ト 六匁弐分四厘 時蔵殿木綿代取分 かり (31)

## 十一月十九日分

- 一 金拾弐両也 同惣兵衛 5 渡しかり (32)
- 一 金壱両三分也 桑原行酒袋代かり (33)
- 一 金拾三両弐分ト 三匁六分八厘 大森谷五郎 殿大豆代かり (34)
- 一 金壱両ト 六匁六分七厘 ちむれ文平殿同断 かり (35)
- 一 六貫六百文 本山講預り (36)
- 一 拾貫六百廿四文 車屋四軒払方かりメ (37)
- 一 金四両壱分三朱也 桶屋払方かり (38)
- 一 三貫八百卅六文 縫物師かり (39)
- 一 金四両也 蔵日用かり (40)
- 一 金百両也 普請引当 (41)
- 一 金五拾両也 同断戌引分 (42)
- 一 金五拾両也 給金引当 (43)
- 一 金五拾両也 買米高直ゟ引置ク (44)

### 十七口

メ 金千百八拾弐両弐分三朱ト 拾七匁七分 廿 壱貫六十文 此金三両ト 五分四厘 (45) さし引

✓ 金七拾弐両ト 拾匁三分壱厘 過上徳也 (46)

#### 此所

金七十弐両也 本家へ為登金 (47)

#### 戌冬造り高

一 酒百八拾弐石七斗弐升

同十月ゟ亥九月迄買入メ (48)

一 同七拾六石四斗一升一合 (49)

## 亥八月ゟ作り高

一 新酒七拾弐石八斗 (50)

#### 三口

メ 三百卅壱石九斗三升一合 (51)

内 一 三百五拾八石壱斗弐升六合 うり高物メ

(52)

一 廿五石 新酒有物 (53)

さし引 メ 五拾壱石壱斗九升五合 過 うり出 し (54)

外二焼酎 十四石弐斗六升 うりあり (55)

亥十一月廿日改 掛方惣メ

一 金千七百八拾壱両ト 三分六厘 (56)

#### ①七〇

定メ

戌秋改 5 当改迄こ

一 金百四拾七両也 ふエル (57)

#### 尤此内

金拾壱両斗 時かし○印出しテ此内へ入ル (58)

金拾壱両ト 六匁六分七厘 浦賀いつミや塩代〇 印出ル入ル (59)

X

訳書

#### 戌十月改

一 金九百九拾三両弐朱卜 九拾五匁三分 酒正 油米大豆品々有物 (60)

#### 戌冬ゟ当改汔買入メ

一 金千六百九両ト 五分五厘 米二千百十五俵ト三斗五升 切手共入テ (61)

#### 同断

- 一 金弐百七両三分 壱匁六分七厘 大豆三百七 十三俵 (62)
- 一 金三拾六両弐分ト 三匁五分八厘 小豆七十 三俵 (63)
- 一 金百四拾弐両壱分卜 八匁三分四厘 小麦弐 百六十六俵 (64)
- 一 金四拾九両壱分壱朱ト 拾四匁八分 大麦ツ キ代メ (65)
- 一 金三拾四両三分ト 拾匁九厘 躶麦九十八俵 (66)
- 一 金七拾両卜 弐匁五分六厘 塩取合六百四拾 九俵 (67)
- 一 金三百拾七両弐分卜 九匁四分五厘 酒百三

拾駄卜四石三斗一升一合 焼酎廿駄卜弐斗六 升五合 (68)

一 金廿壱両壱分ト 四匁八分壱厘 酢五拾六樽 ト九斗七升 (69)

#### 十口

メ 金三千四百八拾壱両壱分三朱ト 百五拾壱匁 弐分 (70)

#### 内

- 一 金九百九拾六両ト 九拾四匁七分壱厘 当改 あり物メ (71)
- 一 金六拾五両卜 九匁六分六厘 飯米七十八俵 麦六石九斗 (72)

#### 二口

メ 金千六拾壱両ト 百四匁三分七厘 (73) 指引

メ 金弐千四百廿壱両ト 拾三匁八厘 (74)

#### 当改賣上ケ惣メ高

一 金三千百七拾五両弐分卜 五匁壱分九厘 (75)

古酒 三百拾石弐斗二升五合 (76)

新 / 四十七石八斗七升七合 (77)

正油 四百七十七石一斗五升 (78)

正中 十七石六斗四合 (79)

米 千八十五俵 (80)

大豆 二百六十六俵 (81)

小麦 七十一俵 (82)

小豆 廿俵 (83)

大麦 百十五俵 (84)

酢味噌ひへかす糠品々メ (85)

指引 メ 金七百五拾四両壱分ト 七匁壱分壱厘 (86)

#### 諸入用

- 一 金廿九両三分ト 四十六文 諸入用メ (87)
- 一 金九両ト 八百廿二文 諸駄ちんメ (88)
- 一 金六拾五両卜 九匁六分六厘 飯米七十八俵 大麦六石九斗 (89)
- 一 金六拾五両壱分ト 拾壱匁壱分 薪買入メ

#### (90)

- 一 金七両 ト 弐百八十文 車屋四軒払メ (91)
- 一 金六両壱分ト 七百六十六文 普請方払メ (92)
- 一 金壱両也 大工払メ (93)
- 一金九両弐分弐朱ト 弐匁四分六厘 七百六十 文 桶屋払方メ (94)
- 一 金四両三朱卜 弐貫五百十弐文 普請日用方 払方 (95)
- 一 金五両壱分ト 三百十弐文 縫物師払メ (96)
- 一 金拾四両弐分弐朱卜 五匁六百廿六文 調物 払方メ (97)
- 一 金三拾五両壱分弐朱ト 壱厘 酒樽買入メ (98)
- 一 金七拾九両三分ト 五百十四文 正油樽買入メ (99)
- 一 金三両壱分一朱卜 弐百卅八文 薬礼メ (100)
- 一 金廿弐両弐分ト 八百五拾六文 蔵日用十七 人払方 (101)
- ー 金廿六両弐分三朱ト 十八文 若者十一人か し、(102)
- 一 金三両三分也 地代渡し (103)
- 一 金五拾両也 給金引当 (104)
- 一 金五両壱分ト 拾弐匁九厘 邱店諸色払 (105)
- 一 金四拾五両壱朱卜 八匁弐分三厘 同取替払 方メ (106)

## 廿口

メ 金四百八拾七両三分弐朱ト 四拾八匁五分五 厘 七貫七百六十六文 (107)

#### 無尽覚

- 一 金七両弐分 新融通かけ金 (109)
- 金壱両弐朱ト 拾三貫百九十二文 大成講か け金 (110)

- 一 金拾七両ト 五匁六厘 善照寺無尽十四番目迄かけ金 (111)
- 一 金六両弐分弐朱ト 六百五十七文 車屋無尽 五番目迄かけ金 (112)

X

#### (人)利取遣り

覚

## 戌九月ゟ二月迄

- 一 三貫拾五匁一分五厘 併へ入分 (113) 内 七百五十八匁二分三厘 遣り分 (114) ルメ 弐貫弐百五十六匁九分二厘 取入分 (115) 二月 5 八月迄メ
  - 一 弐貫八百三十八匁四分一厘 命へ入取分 (116)

内 六百十六匁壱分七厘 遣り分 (117) ルメ 弐貫弐百廿弐匁弐分四厘 取分 (118) 弐七

メ 四貫四百七拾九匁一分七厘 (119) 此金 七拾四両弐分ト 九匁壱分六厘 (120) 右介へ受取候分也

以上が帳簿内の記述であり、裏表紙には「念店」と記されている。「小田原店勘定細見帳」の差出しは、このように「念店」もしくは「作店」「作店②店立合」などとなっている。この年は宛先の記載がないが、記載がある場合は「御本家様」と記されている39。

「勘定細見帳」は、①「覚」と「内」による 資産負債勘定の部、②「訳書」と「諸入用」に よる収益費用勘定の部、③「無尽之覚」による 講の部、④「因利取造り覚」による利息の部 の4部で構成されている。以下、個々の内容に ついて立ち入って見ていく。

## ①「覚」と「内」

(1)~(18)は現物資産で、酒、米、小麦、小豆などの醸造品および商品在庫である。18口ある在庫の合計(19)は996両ト94匁7分1厘で、醤油が543両を占めている。なお、醤油在庫が全体のかなりの部分を占める傾向は、幕末においても同様である。たとえば文久2年上期「覚」によると、現物資産総額は1,243両ト7匁3分9厘であり、醤油諸味と生揚醤油は計730両余を占めている。次の(20)~(26)は金融資産である。御殿場酒店への醤油貸しや本店への預け金、近隣への貸金などが含まれている。現金は少ない。現物資産合計と金融資産合計を合算したのが1,256両1分3朱ト103匁5分5厘(27)で、これが資産合計となる。

次に「内」の見出しをもって始まるのが負債である。冒頭に記されている元手金500両(28)は明治5年まで継続して同額が計上されている。本店からの借入れが(29)と(30)で、合わせて394両余になる。他に主な負債は普請引当ての100両(41)である。その他は商人からの木綿代、大豆代、酒代などの借入れや日雇い代がその内容となっている。給金引当ての50両(43)は、「訳書」の「諸入用」の部でも記載があり(104)、二重計上されている。

資産合計から負債合計を差し引いて、72両ト10匁3分1厘(46)を計上しており、それが「過上徳」とされ、すなわち純資産である。次の「此所本家へ為登金」72両(47)は、本家への上納金額を書出したものである。このように為登金は毎年上期に純資産の算出をもとに計上されている。これについては後述する。

(48)から(54)は酒の在庫高を把握するための 記述といえる。前期造高,前期買入高,当期造 高の合計をまずだし,そこから売高と当期在庫 の合計を差し引いて「さし引き うり出し」と して酒の在庫高を算出している。ここでは焼酎 の売高(55)も追記している。

売掛金は「覚」に含めず別立てとしており,

<sup>39</sup> 他の年では、差出しと宛先は、駿州 介店改→江州日 埜御本家様(天保4年下期)、⑤店→山中御本家様 (天保5年下期)、介店⑤店立合改→江州御本家様 (天保6年上期)などのように表記されている。

「掛方」(56)~(59)がその記述である。ここではまず売掛金合計(56)を示し、次に対前年増減額147両(57)を記している。

## ②「訳書」と「諸入用」

次は「訳書」と「諸入用」の部で, 収益費用 勘定に相当する。「訳書」ではまず、期主在庫 である「酒正油米大豆品々有物」993両2朱ト 95匁3分(60)を書き出す。これは天保9年上期 の「勘定細見帳」の現物資産の総額と一致す る。続いて米、大豆、小豆など、原料および商 品の仕入実数と金額を記載している。この合計 が3,481両1分3朱ト151匁2分(70)である40。 次の996両ト94匁7分1厘(71)は期末在庫で (19)と一致する。奉公人の衣食住は店の負担と なる。よって、飯米78俵と麦6石9斗の合計額 65両ト9匁6分6厘(72)の食費は自家消費であ り、奉公人の労賃である。そして期末在庫(71) と自家消費(72)を合算して1,061両ト104匁3分 7厘(73)が記載されている。この(70)から(73) を差し引いた2,421両ト13匁8厘(74)が、売上 原価に相当する。(75)は売上高で,以下,(85) まで売上品名が列挙される。その内容は、酒、 醤油, 焼酎, 米が中心で, 他に, 大豆, 小麦, 小豆、大麦などあることから、醸造品と原料の 両者を販売品として扱っていたことがわかる。 なお、それらは実数のみが書き上げられ、それ ぞれの金額明細は記載されていない。「指引 メ | は売上高(75)から売上原価(74)を差し引い。 た754両1分ト7匁1分1厘(86)で、これが売 上総利益となる。

(87)~(108)は「諸入用」で販売原価以外の費用にあたる。諸入用、諸駄賃のあとに、再び飯米と大麦の労賃が65両ト9匁6分6厘(89)と記載され、(72)と二重計上となっている。費用の内訳は、酒および醤油醸造の設備投資、人件費、本店との差し引きで構成されている。これ

ら20口を合算すると計487両3分2朱ト48匁5分5厘ト7貫766文(107)となり、銭の値を銀に換算して算出しなおしたのが次の489両3分ト3匁6分1厘(108)である。なお、この天保10年上期は売上総利益から費用合計を差し引きした営業利益を算出していない。「小田原店勘定細見帳」では営業利益の記載がないのが通例であり、営業利益を算出しているのは、天保6年上期、弘化2年上期、安政4年下期、安政5年下期、安政6年下期、万延元年(1860)下期のみである。

## ③無尽之覚

(109)~(112) は無尽講への掛金である。なお,幕末には難村講や手段講への掛金などもみられる $^{41}$ 。小田原藩はこうした無尽講や頼母子講の類によって,集金した金の一部を利殖にまわし,資金拡大を目指す政策をとっていた $^{42}$ 。

## ④ 決利取遣り覚

前年9月~当年2月の本店への支払利息3貫15匁1分5厘(113)から,同じく前年9月~当年2月の本店預り利息758匁2分3厘(114)を差し引いたのが,2貫256匁9分2厘(115)である。当年2月~8月の本店への支払利息2貫838匁4分1厘(116)から同じく当年2月~8月の本店預り利息616匁1分7厘(117)を差し引いたのが,2貫222匁2分4厘(118)である。そして(115)と(118)の合計が4貫479匁1分7厘(119)となり,更にこれを金に換算しなおして74両2分ト9匁1分6厘(120)を記載し,これが最終的に本店に支払う利息合計金額となる。

以上にみた帳簿形式は下期も同様の記載方式 を採っており、天保から少なくとも明治初期に 至るまで一貫して同じ形式で記述されている。

<sup>40 (70)</sup>は計算上, 5厘がつくはずである。(74)の計算 は正しいので, 原史料での書き忘れとみられる。

<sup>4</sup> たとえば文久3年上期では「御上様へ難村講かけ メ」として45両が記載されている。

<sup>42 『</sup>小田原市史』通史編近世(1999), 926-928頁。

## (2)「小田原店勘定細見帳」の特徴

「小田原店勘定細見帳」は資産負債勘定と収益費用勘定を備えた複式帳簿の形式を採用しているが、売掛金が「覚」に含まれていない。また、既述したように、給金引当てを資産負債り、労賃の一種である飯米、麦も、「訳書」と「諸入用」の両方に二重に記載されている。給金引当てについていうならば、費用として認識していたのであり、音を重複記載は、複式帳簿として未熟するというより、帳簿記述者あるいは経営者あるというより、帳簿記述者あるいは経営者の認識把握の二重性を示している。なお、給金引当ての重複記載は「小田原店勘定細見帳」では見られる43。

次に指摘しうる特徴は、「訳書」の情報量の 豊富さである。通常は買入れから売上げを差し 引いた粗利のみを記載するが<sup>44</sup>、買入高の内訳 実数、金額、総額、売上高の内訳実数と総額も 記載している<sup>45</sup>。ただし売上内訳金額の記載は ない。

更に注目すべき点は、下期の「勘定細見帳」はいわば中間決算であり、翌年上期が本決算となっていることである。買入期間についての記載表記をみると、天保9年下期の「勘定細見帳」では、「十月改後6」とあり、翌天保10年上期では「戌冬6当改迄買入メ」となっている。一方、売上期間においても、たとえば天保13年下期は「寅十一月改6卯三月十日迄」とあり、天保14年上期では「寅十一月改後6卯九月廿五日迄」となっている。このように、下期の帳簿は半年分を記載したもので、次の上期は下

期を含めた一年分が記載されている。すなわち,上期が本決算で下期はその途中経過を示す中間決算に相当している。このことは,下期の売上合計額や,原料,商品仕入れ実数,酒の造高が,翌年上期を上回ることがない点によって傍証される。

なお, 小田原店と同様, 年二回決算の御殿場 酒店の「勘定細見帳」もまた、下期が中間決算 で、翌年上期が本決算となっている。一方、本 店, 伊豆店, 沼津 阡店は年一回決算であるた め前述の二店とは異なる。年二回決算を行う店 は中井源左衛門家後野糸店46, 西川甚五郎家江 戸店47など他家にもしばしばみられるが、中間 決算,本決算の決算方式を採用している商家の 例は非常に珍しい。なお、日野商人、矢尾喜兵 衛家「店御帳」は年一回決算である⁴。また、 灘の嘉納治郎右衛門家「総勘定帳」(損益計算 書),「店卸帳」(貸借対照表)も年一回決算で ある49。伊丹の小西新右衛門家でも,本家「勘 定帳」「酒見味醂勘定帳」も, また小西家の江 戸店である小西屋利右衛門店の決算簿「諸勘定 之覚」も、年一回決算である50。

## 4 小田原店における経営動向

第2章では山中家の出店四店舗を概観し,更に第3章で小田原店に照明をあて,天保10年上期の勘定帳に焦点を絞り込んでこれを子細に検討した。本章では天保4年下期から明治5年上期の「小田原店勘定細見帳」を分析し,小田原店の史的経営動向を探る。まず,小田原店における原料および商品の仕入れ,生産,販売を,

<sup>☆</sup> 天保8年下期から文久2年上期。

<sup>4</sup> たとえば、長井嘉左衛門家大和屋九郎左衛門店「算 用目録」における「利」の項では粗利のみが記載さ れている。

<sup>&</sup>lt;sup>5</sup> 遠州三ヶ日で酒造業を展開した日野商人, 階堂家の 「店卸勘定帳」でも同様の記述方法がみられる。し かし日野商人に広く特徴的な記述方法であるといえ るか否かは, 更に豊富な個別事例を必要とする。

<sup>\*6</sup> 小倉栄一郎によると、中井源左衛門家後野糸店では、12月と新糸の出廻る前の5月の二回に分けて店卸を行い、年二回決算であった。しかし主力である仙台店やその出店、枝店は、年一回決算である(小倉栄一郎(1962)、143頁)。

<sup>47</sup> 賀川隆行 (2002), 18-48頁。

<sup>48</sup> 末永國紀 (2003)。

<sup>49</sup> 柚木学 (1975), 227-240頁。

<sup>50</sup> 賀川隆行 (1997), 10-52頁。

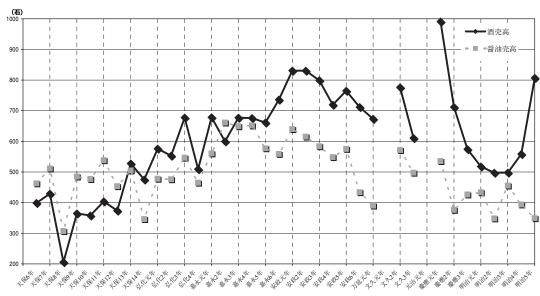


図2. 小田原店の酒売高と醤油売高

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

特に酒や醤油の推移に注意を払いながらその特徴的傾向をみる。次にこれを収益費用勘定における収支の変化を通して確認することで,小田原店の経営動向の特質を明らかにする。

#### (1) 仕入れ・醸造・販売の推移

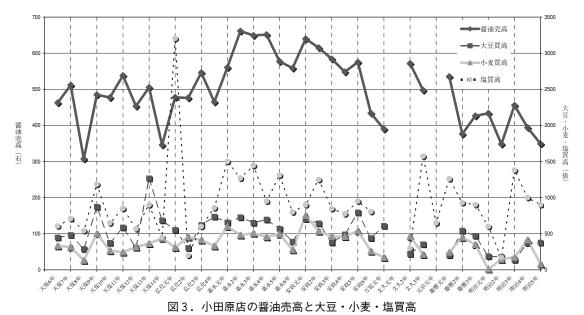
第2章の〈表2〉および〈表3〉でみたように、小田原店の取扱い品目を大別すると、醸造品と、穀類などの原料品がある。穀類に関しては、大量の米販売を行っていることが明らかになった。

醸造品の仕入れには、酢や味醂も含まれている。これらの仕入れは継続的であるが、販売についてみると、酢は慶応3年下期以降、味醂は天保13年、弘化3年、弘化4年の各下期のみに限られている。いずれも自家消費用以上の仕入量とみられるが、どこに渡ったのか不明である。なお、酢と同様、幕末から販売がはじまった商品に粉糠がある。粉糠は御殿場酒店では天保期より販売がみられるが、小田原店においては文久2年下期が最初であり、以降、明治初期までほぼ継続して販売している。もっとも売高

実数の上では、粉糠も酢も他店に比して少量に とどまっている。焼酎は天保10年、天保11年、 万延元年から慶応3年までは、買高と売高がお およそ一致しているので、少なくともこの間の 製造は殆どなされなかったか、僅かであったと みられる。

次に、酒と醬油の売高の推移を示したのが、〈図2. 小田原店の酒売高と醬油売高〉である。この図が示すように、天保期においては、醬油は概ね酒の販売量を上まわっている。安政期以降は酒売高が醤油売高を常時越え出ている。小田原店において醤油の買入れはないので、売高量はすなわち醸造量であると考えてよい。醤油醸造と販売が、小田原店において見過ごすことのできない生産と営業の一つであったことが、ここから浮かび上がる。以下ではまず、醤油醸造に必要な大豆、小麦、塩の仕入れと販売を見ることにし、次に酒造高の推移を米の買高、売高、米価などの面から検討する。

醤油売高と共に、大豆、小麦、塩の買高の推移を示したのが〈図3.小田原店の醤油売高と大豆・小麦・塩買高〉である。一貫して大豆が



(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

小麦よりやや多い買入量で推移している。塩は、大豆よりも多く仕入れている<sup>51</sup>。特に弘化元年に3,200俵を超えており、何故突出した塩の仕入れを行ったのか理由は不明である。小田原店では他店舗と異なり、若干の例外はあるものの、塩の販売は殆どない。塩の仕入れは醤油醸造以外の目的も考えられ、更に検討が必要である。嘉永から安政期にかけて、大豆、塩、小麦のすべてが比較的安定した推移をみせている。この時期は、醤油の売高が約550石から650石のあいだを維持している。しかし万延元年に一度落ち込み、慶応2年に対前年高で159石減少して以降、明治初期に至るまで低調な推移にとどまった。

次に酒造高を抽出したのが〈表 6. 小田原店 酒造高実数〉である。弘化期から安政期にかけ て, 醸造高は安定している。殊に安政 2 年は616 石 6 斗 7 升を数え, 小田原店における最大の醸 造量となる。しかしながら、文久2年には272 石4斗に落ちる。翌年ただちに回復するもの の、慶応3年には86石7斗6升まで激減する。

次に,酒造高の推移を,酒の買高,売高の推 移と重ね合わせたのが、〈図4. 小田原店の酒 造高・酒買高・酒売高〉である。また、小田原 店における米買高、米売高、米相場(金換算) の推移と共に一石あたりの米の購入価格を買高 と実数から算出して示したのが、〈図5.小田 原店の米買高・米売高と米相場・一石価格〉で ある。天保期は幕府による酒造制限令が頻繁に 出された時期である。天保7年の大飢饉は小田 原においても深刻な打撃を与え、〈図5〉から も確認されるように、米相場の高騰を招いた。 小田原店が仕入れた米の一石価格も、同様に騰 貴している。天保7年8月12日「御配布廻り写 し (幕府より酒造制限令の通達)52」は,「諸国 酒造之儀三分之一減石可致旨 | が通達されたこ とを示しており、これらの影響により、小田原 店の天保8年の酒造高は83石4斗に落ち込ん

<sup>51</sup> 小田原店の醤油製法は不明だが、たとえば谷本雅之によれば、嘉永期のヤマサ醤油の製法では、小麦と大豆を1対1の割合で混合し、塩の分量は「上」では小麦、大豆と同量で、「上」より品質の劣る「次」ではそれを上まわる(谷本雅之(1990)、253頁)。

<sup>&</sup>lt;sup>52</sup> 御殿場市立図書館所蔵。

だ。安政2年における酒造高の多さは、安政元年の米の買高がこの時期の最大量3,880俵に達していることを受けての上昇であることが確認できる。と同時に、安政元年の米の売高は2,304俵余で、やはり大きな伸びを示している。仕入れた米は、例外的な年があるものの、およそ5割が売りにまわされ、5割が酒造用に使われたとみられる。なお嘉永元年は米の買高が突出している。米価に目立った変動はなく、なぜこの年に大量の米を仕入れたかは検討を要する。

元治元年(1864)上期の帳簿が残っていない

表 6. 小田原店酒造高実数

ヘニトケ	<del>-</del>	11	ر. ال		Sand	VH H-II 1711 /\
会計年	石	斗	升		7四:	造制限令
天保6年	310	8	0	制限令		
天保7年	340	4	0			
天保8年	83	4	0	制限令		
天保9年	271	2	5	制限令		
天保10年	182	7	2	制限令		
天保11年	267	8	0	制限令		
天保12年	318	4	9	制限令		
天保13年	337	4	6	制限令		
天保14年	291	1	7			
弘化元年	377	5	0			
弘化2年	410	3	6			
弘化3年	409	6	0			
弘化4年	410	2	0	制限令		
嘉永元年	429	2	5			
嘉永2年	406	8	0			
嘉永3年	479	6	0	制限令		
嘉永4年	454	7	0			
嘉永5年	460	2	0			
嘉永6年	504	1	0	制限令		
安政元年	513	6	0			
安政2年	616	6	7			
安政3年	577	5	0			
安政4年	579	5	0			
安政5年	514	2	0			
安政6年	457	5	0	制限令		
万延元年	443	3	0	制限令	9月	諸国鑑札高之三分之二造
文久元年			-			
文久2年	272	4	0	制限令		
文久3年	430	1	0	制限令		
元治元年			_			
慶応元年	559	7	0			
慶応2年	418	7	0	制限令	2月	諸国鑑札高之三分之一造
慶応3年	86	7	6	制限令	9月	諸国鑑札高之三分之一造
明治元年	245	1	0			
明治2年	304	6	0			
明治3年	259	6	0			
明治4年	409	5	0			
明治5年	409	9	0			

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。柚木重三(1940),「酒造制限令一覧年表」161-169頁。

(註) ――は帳簿がないことを示す。

ため、この年の米の買高などについて確認でき ないが、翌慶応元年の酒造高は559石7斗であ る。したがって、元治元年の米の買高は相当量 あったであろうと推測される。しかしながら、 慶応3年に酒造高は最少量の86石7斗6升まで 激減する。なおこの年は「酒造減石御改ニ付中 間入り用割合出ス分 | として35両2分2朱ト1 **匁4分の支出が計上されている。前年の慶応2** 年の米の買高は1,225俵2斗5升で、これは天 保8年に次ぐ低さである。これほどに仕入れが 激減したのは、米価の高騰によるものといえ る。小田原店における一石あたりの米買入価格 でみると、〈図5〉にみるように、慶応2年は 前年より約2倍上昇したことがわかる。しかし 売上合計金額も,前年より1.78倍増加してい る。その原因は、米や大豆の売上げ実数が増大 したためである。酒造高を天保期から明治初期 まで長期的に眺めてみると、酒造高と米の買 高, 売高はほぼ連動しており, 既述したよう に、幕末、殊に慶応2年における米価の大騰貴 を受けた年の酒造高は、わずか86石にまで落ち 込まざるをえなかった。

明治4年には酒造高が上昇に転じる。しかし営業利益は、明治4年マイナス1,403両1分ト10匁7分2厘から、明治5年マイナス1,884両2分ト8匁8分6厘の大幅赤字(計算値)となる。収支の推移については次節で詳述する。

## (2) 収益費用勘定における収支の推移

天保6年から明治5年の収益費用勘定を示したのが〈表7.小田原店収益費用勘定〉である<sup>53</sup>。天保11年から弘化元年のあいだは、天保12年をのぞき営業利益はマイナスである。殊に天保13年はマイナス330両2分ト7匁6分(計算値)と大幅赤字であるが、これは酒樽の買入

<sup>□</sup> 天保4年および天保5年の現存する「小田原店勘定細見帳」は下期のみであるため、天保6年から数表化した。〈表8.小田原店資産負債勘定〉についても同様である。

れ48両余と醤油樽の買入れ86両余の固定設備への支出が原因とみられる。この固定設備への投資が天保後期から嘉永期にかけての酒造高、醤油醸造高の上昇へと繋がる一因であると考えら

れる。

嘉永5年に3,817両1分ト5匁4分8厘で あった売上高は、嘉永6年に5,515両3分ト8 匁3分となり大きな飛躍をみせた。これは米の

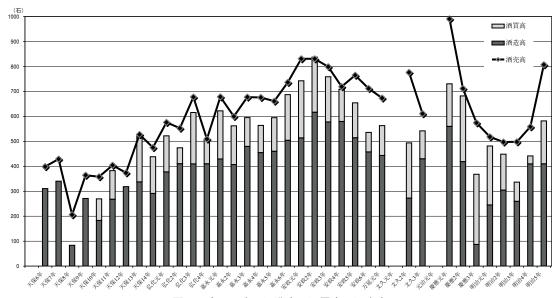


図4. 小田原店の酒造高・酒買高・酒売高

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

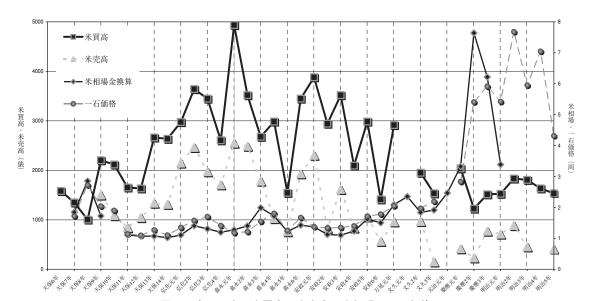


図5. 小田原店の米買高・米売高と米相場・一石価格

- (出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。三井家編纂室編『自天明七年至明治四年大阪金銀米銭并為 替日々相場帳』 2 (1916),附表。
- (註) 『自天明七年至明治四年大阪金銀米銭并為替日々相場帳』附表の米相場は銀表記であるため、同表の金相場 平均値から金に換算し、米相場平均値とした。

表7. 小田原店収益費用勘定

ne 20	800												迈	江	日月	野商	5人	Щ	中戶	右	衛	門家	きの	出几	吉紹	E営												-	- 6	59 <b>–</b>
(9-(9)	匁.	2.8 8	2.5 2	0.3 7		3.50		0.33	7.60	7.07	12.98	8.4 2	8.5 1	6.02	0.57	14.3 4	4.28	4.7 9	11.4 8	11.8 6	7.37	0.5 1	1.7 2	12.1 5	0.3 7	0.25	4.64		6	5.5 4	1	13.1 3	0.89	14.8 5	6.19	10.65	11.5 3	10.7 2	8.86	
①営業利益 (=⑤)	声.分.朱	51.3.2	30.0.0	48.2.0	633.0.0	264. 2. 0	△95.2.0	42.0.2	△330. 2. 0	△24.3.0	△16.3.0	173.3.0	197. 2. 0	247.0.0	214. 1. 0	321. 1. 0	722. 2. 0	785.0.0	1,003.2.0	1,218.0.0	290. 1. 0	466.1.0	203. 2. 0	777.3.0	371.3.0	687.0.0	325. 1. 0	-	1,045.2.0	945. 2. 0	-	1,583.2.0	693. 2. 0	661.0.0	2,036.3.0	957. 1. 0	1,573.0.0	$\triangle 1,403.1.0$	$\triangle 1,884.2.0$	
丰	匁.	1.42	12.48	13.3 8	11.60	3.61	1.77	1.4 0	12.43	5.15	4.90	0.47	7.53	5.9 1	2.66	3.66	4.72	11.48	13.38	9.84	9.2 1	0.32	12.5 3	3.07	8.89	7.61	9.02			11.18		3.95	12.9 7	6.29	12.24	11.79	11.70	10.4 6	11.08	
6費用合計	両.分.朱	414. 1. 3	529.3.0	340.1.0	449.0.0	489.3.0	494.0.3	464.0.2	545.1.0	396.1.0	508.0.0	560.1.0	705.3.0	481.3.0	623.2.0	603.1.0	585.0.0	709.3.0	658.2.0	764.0.0	772.1.0	835.3.0	745.2.0	739.2.0	851.1.0	687. 1. 0	895.2.0		925.2.0	990.3.0		1,819.0.0	2,074.1.0	1,925.0.0	1,984.1.0	2,001.2.0	2,209.0.0	3,152.2.0	2,738.2.0	
=(1-(3)	从.	8.05	0.00	13.7 5	9.7 7	7.1 1	5.43	1.73	4.8 3	13.08	7.92	8.89	1.04	11.93	3.2 3	3.00	9.00	1.2 7	9.86	6.70	1.58	0.83	14.2 5	0.2 2	9.2 6	7.8 6	13.6 6		14.9 5	1.7 2		2.08	13.8 6	6.14	3.4 3	7.4 4	8.23	14.7 4	2.2 2	
⑤売上総利益 (=	雨.分.朱	466.1.0	560.0.0	388.3.0	1,082.1.0	754.1.0	398. 2. 0	506.1.0	214.3.0	371.1.0	491.0.0	734.0.0	903. 2. 0	728.3.0	837.3.0	924.3.0	1,307.2.0	1,495.0.0	1,662.1.0	1,982.1.0	1,062.3.0	1,302.0.0	949.0.0	1,517.2.0	1,223.0.0	1,374.1.0	1,220.3.0	-	1,971.0.0	1,936.2.0	-	3,402.3.0	2,767.3.0	2,586.1.0	4,021.1.0	2,959.0.0	3,782.1.0	1,749.0.0	854.0.0	- は帳簿がないことを示す。
	匁.	11.5 0	1.2 5	12.3 1	3.2 2	5.19	0.14	4.8 9	10.68	2.2 7	12.2 5	5.3 2	0.84	0.33	1.90	3.1 1	3.63	8.8 6	5.4 8	8.3 0	12.4 0	12.0 6	11.2 3	2.3 1	14.7 2	11.4 0	13.9 0		13.3 4	4.13	1	8.50	13.0 7	10.6 1	1.4 2	4.5 6	2.9 2	4.63	2.4 5	- は帳簿がな
争売上高	周.分.朱	1,740.2.0	1,876.3.0	1,979.1.0	3,667.1.0	3,175.2.0	2,000.3.0	1,902.3.0	2,628.3.0	2,184.0.0	3,149.2.0	3,763.0.0	4,208.0.0	3,088.1.0	4,000.1.0	3,694.1.0	4,263.2.0	4,468.1.0	3,817.1.0	5,515.3.0	4,573.3.0	4,040.0.0	3,803.0.0	3,535.0.0	4,189.0.0	3,640.2.0	4,059.2.0	-	4,601.0.0	4,498.3.0	-	7,262.1.0	7,665.0.0	13,640.2.0	9,996.0.0	10,574.3.0	10,485.1.0	9,026.0.0	7,759.3.0	
(=(1)-(2))	匁.	123.4 5	80.0 0	13.5 6	278.4 5	13.0 8	69.7 1	78.1 6	5.8 5	4.19	4.3 3	11.4 3	14.8 0	3.4 2	13.6 7	0.2 1	9.63	7.5 9	10.6 2	1.60	10.8 2	11.2 3	11.98	32.09	5.4 6	3.5 4	0.24		13.1 9	2.4 1		51.42	14.2 1	4.4 7	12.9 9	12.1 2	6 9.6	4.8 9	60.23	合は計算のう
③売上原価 (=(	雨.分.朱	1,272.1.0	1,315.1.3	1,590.1.0	2,580.1.0	2,421.0.0	1,601.0.0	1,395.1.0	2,414.0.0	1,812.2.0	2,658.2.0	3,028.3.0	3,304.1.0	2,359.1.0	3,162.1.0	2,769.2.0	2,962.3.0	2,973.1.0	2,154.3.0	3,533.2.0	3,511.0.0	2,738.0.0	2,853.3.0	2,017.0.0	2,966.0.0	2,266.1.0	2,838.3.0	-	2,629.3.0	2,562.1.0	-	3,858.3.0	4,897.0.0	11,053.3.0	5,974.2.0	7,615.2.0	6,702.3.0	7,276.3.0	6,904.3.0	算出可能である場合は計算のうえ記載した。
消費合計	汝.	6.39	88.92	24.6 4	102.1 1	104.3 7	81.7 6	50.3 9	13.1 0	14.6 0	11.7 7	3.0 0	4.53	1.93	6.02	1.58	2.8 4	2.0 4	8.12	85.8 2	5.9 7	14.08	14.3 1	11.3 8	7.19	10.7 7	14.4 9		7.19	11.5 8	1	6.64	9.8 7	1.7 1	13.2 5	3.67	54.94	10.5 0	14.7 2	場合でも,
②期末在庫+自家	両.分.朱	652.3.0	785. 1. 3	756.0.0	1,058.2.2	1,061.0.0	983.0.0	733. 3. 0	796. 2. 0	963. 2. 0	828.3.0	724.0.0	812. 2. 0	742. 2. 0	1,185.2.0	1,296.1.0	1,158.3.0	1,499.2.0	1, 191. 1. 0	970.3.0	1,088.1.0	1,181.0.0	1,188.1.0	1,284.0.0	1,565.1.0	1,043.0.0	1,596.1.0	-	1,243.0.0	1,208.2.0	-	2,358.3.0	3,856.1.0	3,502.2.0	3,486.1.0	3,775.3.0	4,612.2.0	5, 199. 2. 0	3,099.0.0	角人館所蔵)。 直が記されていない
	次.	129.8 4	168.9 2	165.7 0	380.5 6	151.2 0	151.4 7	128.5 5	3.95	3.7 9	1.08	14.4 3	64.3 3	5.3 5	4.69	1.7 9	12.4 7	9.63	93.7 4	87.4 2	61.7 9	55.3 1	86.29	41.4 7	72.6 5	14.3 1	14.7 3		5.38	13.9 9	1	58.0 6	8 0.6	6.18	10.2 4	0.79	4.63	0.39	74.9 5	(近江日野商 原史料に数値
①期首在庫+仕入合計	両.分.朱	1,925.0.0	2,100.3.2	2,344.0.2	3,638.3.2	3,481.1.3	2,584.0.0	2,129.0.0	3,210.3.0	2,776.1.0	3,487.2.0	3,752.3.0	4,116.0.0	3, 101. 3. 0	4,348.0.0	4,065.3.0	4, 121. 2. 0	4,472.3.0	3,344.3.0	4,504.1.0	4,598.2.0	3,918.2.0	4,041.0.0	3,301.0.0	4,530.1.0	3,309.1.0	4,435.0.0	-	3,873.0.0	3,770.3.0	-	6,217.2.0	8,753.2.0	14,556.1.0	9,461.0.0	11,391.2.0	11,316.1.0	12,476.2.0	10,003.1.0	(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。 (註) ムはマイナスを示す。原史料に数値が記されていない
会計年		天保6年	天保7年	天保8年	天保9年	天保10年	天保11年	天保12年	天保13年	天保14年	弘化元年	弘化2年	弘化3年	弘化4年	嘉永元年	嘉永2年	嘉永3年	嘉永4年	嘉永5年	嘉永6年	安政元年	安政2年	安政3年	安政4年	安政5年	安政6年	万延元年	文久元年	文久2年	文久3年	元治元年	慶応元年	慶応2年	慶応3年	明治元年	明治2年	明治3年	明治4年	明治5年	(出所)「小田 (註) Δは

売上げが,760俵から1,931俵に増えたことによる。

売上高は、慶応2年の7,665両ト13匁7厘から慶応3年の13,640両2分ト10匁6分1厘に上昇している。この間を売高実数で比較するとおおよそ米3.3倍、酒0.8倍、醤油1.1倍、焼酎0.5倍、大豆17.2倍となっているため、売上金の上昇は、大豆の売高が大幅に伸びたことに起因する。

明治初期においては急激な売上高の変化がみられ、明治3年10,485両1分ト2匁9分2厘→明治4年9,026両ト4匁6分3厘→明治5年7,759両3分ト2匁4分5厘と下降している。これを酒売上石高でみると、明治3年498石6升4合→明治4年558石3斗1升2合→明治5年807石1升8合と上昇しているので、物価変動の影響を強く受けた結果であると推測できる。

次に費用合計をみると、文久3年990両3分 ト11匁1分8厘から慶応元年には1,819両ト3 匁9分5厘へと倍増する。更にその内訳をみる と,諸入用,飯米,薪代買入れが文久2年以降 上昇する。酒および醤油の樽買入れの実数は不 明だが、慶応元年は酒樽153両余、醤油樽300両 余で、文久3年より共に2倍以上となってい る。明治5年の酒樽買入れは370両にまでの ぼった。飯米でみると、文久3年に95俵84両で あったのが、慶応2年に105俵2分5厘で249両 余となっており、激しい米価高騰がみてとれ る。更に費用合計をみると、明治3年の2,209 両ト11匁7分から明治4年には3,152両2分ト 10匁4分6厘へと千両近く増えているが、その 内訳でみると、小遣入用147両余→275両余、飯 米他395両余→468両余, 普請入用69両余→108 両余, 酒樽買入91両余→192両余, 醤油樽72両 余→172両余, 店の者8人154両余→7人327両 余となっている。あらゆる諸物価が高騰した影 響を如実に受けている。

なお,奉公人の人数を「給金引当」における 「店之者」あるいは「若者」の人数表記から抽 出し、平均値を出していくと、天保期5.8人、 弘化期5.6人、嘉永期7.7人、安政期9.8人、万 延~元治期7.0人、慶応期9.5人、明治初期8.2 人となり、安政期をピークとして平均7.5人ほ どが従事していたとみられる。天保期から安政 期にかけての人員増加は、酒造高および醤油醸 造高の増加の推移とおおよそ一致している。

## 5 小田原店と本家・本店間の資金関係

以下ではまず、小田原店における資産負債勘定の推移の変化とその要因を探る。次に、資産負債勘定の中で記述されている元手金、株金、利息、益金の流れを分析する。前章までは、小田原店の経営の内部に焦点を絞り込んだが、本章では小田原店の「勘定細見帳」における資金の分析を行い、本家や本店とのあいだの資金の流れという面から捉える。このことにより、出店の一つである小田原店が、山中家においてどのような位置づけであったかも検討する。

## (1) 資産負債勘定の推移

天保6年から明治5年の小田原店の資産負債 勘定を示したのが〈表8.小田原店資産負債勘 定〉である。この期間を純資産の推移から大き 〈三つに分け、資産と負債の変化を純資産の推 移から検討する。

天保10年から弘化元年は純資産低減期である。その要因として、米有物や金融資産の減少があげられる。たとえば、天保11年に153両あった米(新内米・新白米・古白米)は、天保12年には37両(御蔵米・同白米)に落ち込んでいる。また、天保9年157両の本店への貸金は天保10年には106両となり、天保12年には僅か1両となった。

弘化から文久期は安定期で資産,負債共に緩 やかな増減を示している。ただし負債額が,弘 化4年809両3分ト13匁3分から翌嘉永元年に は1,413両1分ト13匁4分3厘に,また安政4 年1,401両ト1匁2分8厘から翌安政5年には2,075両3分ト9匁2分1厘と,前年より500両ほど増加している年がある。その原因は,嘉永元年や安政5年では本店からの借入金が増えたためとみられる。なお,嘉永元年はマイナス2両2分ト2匁5分と,僅かではあるが「ふ足損」が記され,この年はじめて純資産が赤字になった。

一方, 慶応期以降の純資産は急増, 急減を繰

り返している。慶応元年の資産合計は、文久3年の約2倍の4,054両1分ト1匁2厘になっている。これは金融資産の増加に起因している。その主要因は、店有金銭が130両2朱ト424貫485文から281両2分ト139貫950文に増え、助郷役所用達金700両が加わったためである。翌慶応2年に、資産合計は更に約900両増加する。このときの伸びは金融資産ではなく、現物資産の増加に起因する。古酒は66両余(20石)から794

表 8. 小田原店資産負債勘定

会計年	①現物	資産	②金融:	資産	③資産合計(	=(1)+(2)	<ul><li>④負債</li></ul>	合計	⑤純資産(過上	)(=3)-4)
	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.	両.分.朱	匁.
天保6年	608.1.0	95. 8 1	223.3.0	4.8 5	833.2.0	10.66	625. 2 . 2	20.22	208.0.0	12.9 4
天保7年	713.0.3	77.50	175.3.0	6.76	890.0.3	9.26	771. 1 . 0	9.56	118.3.0	10.95
天保8年	673.2.0	71. 1 8	576.3.0	17.5 1	1,251.2.0	13.6 9	941.3.0	12.6 7	309.3.0	0.12
天保9年	993.0.2	95.3 0	406.1.0	9.70	1,401.0.2	0.00	898. 2. 0	2.1 6	502.2.0	5.34
天保10年	996.0.0	94.7 1	260.2.0	5.09	1,256.1.3	103.55	1,185.3.0	14.4 9	72.0.0	10.3 1
天保11年	943.0.0	68.06	163.1.0	14.6 1	1,107.2.0	7.67	1,083.3.0	0.4 2	23.3.0	7.25
天保12年	700.0.0	49.42	171.0.0	0.62	871.3.0	5.04	854.0.0	8.66	17.2.0	11.38
天保13年	742.3.0	83. 7 1	219.1.0	6.96	963.2.0	0.6 7	935.0.0	12.3 3	28.1.0	3.3 4
天保14年	934.0.0	88.71	162.3.0	1.38	1,098.1.0	0.09	1,039.1.0	12.8 5	58.3.0	2.24
弘化元年	776.1.0	112.6 5	223.3.0	7.6 1	1,002.0.0	0.26	941.3.0	9.14	60.0.0	6.12
弘化2年	666.3.0	0.13	447.2.0	10.2 3	1,114.1.0	10.3 6	762. 1. 0	7.92	352.0.0	2.44
弘化3年	729.3.0	63. 2 3	299.0.0	12.5 3	1,030.0.0	0.76	887.0.0	2.2 1	143.3.0	13. 5 5
弘化4年	689.2.0	93. 7 4	375. 1. 0	7.79	1,066.1.0	11.5 3	809.3.0	13.3 0	256.1.0	13. 2 3
嘉永元年	1,108.3.0	1,018.5 8	285.0.0	12.3 5	1,410.3.0	10.9 3	1,413.1.0	13.4 3	△2.2.0	2.50
嘉永2年	1,236.3.4	458.8 0	287.0.0	5.6 1	1,531.1.0	14.4 1	1,266.1.0	3.4 6	265.0.0	10.95
嘉永3年	1,108.0.0	11.8 3	231.3.0	3.66	1,340.0.0	0.4 9	863.1.0	7.12	476.2.0	8.3 7
嘉永4年	1,415.2.0	14.8 0	414.1.0	12.1 3	1,830.0.0	11.9 3	1,328.1.0	3.04	501.3.0	8.89
嘉永5年	1,227.1.0	3.80	397.0.0	12.6 2	1,624.2.0	1.4 2	1,279.1.0	0.00	345.1.0	1.4 2
嘉永6年	882.2.0	13.8 2	550.1.0	7.55	1,433.0.0	6.3 7	1,316.1.0	2.1 2	116.3.0	4.25
安政元年	1,016.2.0	4.4 7	359.0.0	12.2 0	1,375.3.0	1.6 7	969.0.0	6.04	406.2.0	10.63
安政2年	1,106.1.0	5.64	470.3.0	11.8 2	1,577.1.0	2.4 6	1,395.0.0	7.18	182.0.0	10.28
安政3年	1,121.3.0	5.96	554.0.0	9.5 7	1,676.0.0	0.5 3	1,432.3.0	13.5 8	243.0.0	1.95
安政4年	1,206.0.0	8.9 6	552.0.0	4.0 6	1,758.0.0	13.0 2	1,401.0.0	1.2 8	357.0.0	11.74
安政5年	1,479.1.0	7.0 4	708.1.0	12.9 0	2,187.2.0	19.94	2,075.3.0	9.2 1	111.3.0	10.73
安政6年	961.1.0	3.9 1	704.1.0	14.5 1	1,665.3.0	3.4 2	1,508.2.0	14.5 2	157. 0. 0	3.90
万延元年	1,596.1.0	14.4 9	787.3.0	8.86	2,384.1.0	8.3 5	2,003.2.0	9.2 2	380.2.0	14.1 3
文久元年										
文久2年	1,243.0.0	7.1 9	648.3.0	8.5 6	1,892.0.0	0.75	1,777.0.0	14.6 5	114.3.0	1.1 0
文久3年	1,208.2.0	11.5 8	854.0.0	10.99	2,062.3.0	7.5 7	1,612.3.0	0.9 1	450.0.0	6.66
元治元年										
慶応元年	1,339.2.0	61,161.6 4	1,695.1.0	9.38	4,054.1.0	1.0 2	2,705.1.0	14.5 5	1,348.3.0	1.4 7
慶応2年	3,856.1.0	9.87	1,098.3.0	3.66	4,955.0.0	13. 5 3	4,374.2.0	2.3 5	580. 2. 0	11. 1 8
慶応3年	3,502.2.0	1.71	1,268.1.0	0.86	4,770.3.0	2.5 7	3, 198. 2. 2	23.8 4	1,571.3.0	1.23
慶応4年	3,486.1.0	13. 2 5	1,421.1.0	14.4 2	4,907.3.0	12.6 7	3,861.0.0	0.1 6	1,046.3.0	12.5 1
明治2年	3,775.3.0	3.67	1,310.1.0	11.4 5	5,086.1.0	0.1 2	4,067.1.0	0.7 2	1,018.3.0	14.4 0
明治3年	4,612.2.0	54.93	2,018.2.0	3.1 9	6,640.0.0	13. 1 2	5,060.2.0	3.0 7	1,579.2.0	10.05
明治4年	5,199.2.0	10.7 0	1,619.0.0	4.3 6	6,818.3.0	0.06	5,899.0.0	2.0 2	919. 2. 0	13.04
明治5年	3,099.0.0	14.7 2	1,494.2.0	8.8 7	4,593.3.0	8.5 9	5,614.2.0	15.8 6	△1,020.3.0	7.27

(出所)「小田原店細見勘定帳」(近江日野商人館所蔵)。

<sup>(</sup>註) △はマイナスを示す。史料に数値が記されていない場合でも、算出可能である場合は計算のうえ記載した。——は帳簿がないことを示す。 明治3年は①+②=③にならないが、原史料の数値をそれぞれ記載した。

両余(135石)に、御殿場酒店からの買入油が105両(30駄)から240両(40駄)に激増したことが大きい。ただし、実数では10駄の上昇でしかない。醤油諸味は慶応元年の57貫余から慶応2年の1,428両余に急増している。しかし、やはり実数では359石から400石の僅かな増量でしかなく、物量そのものの急増よりも、幕末期における物価高騰の影響を受けたためといえる。

負債では、慶応元年から慶応2年にかけて負 債額がほぼ2倍になっているが、「本店差引尻 不足かり」が1,828両余から2,875両余になり、 また慶応2年には御殿場酒店から「酒代差引か り | として467両余が計上されていることが原 因とみられる。明治2年の負債4,067両1分ト 7分2厘が、翌明治3年に5,060両2分ト3匁 7厘と増えたのは、「本店も差引ふ足かり」が 2,706両余から3,357両余に増えたこと、岩原村 庄兵衛からの借金が、明治2年の158両(大豆 代)から、翌明治3年は400両(切手代)に上 がったこと、「蔵のもの給金預り」が50両(3 人)から91両余(5人)に増えたことに起因す る。更に、明治3年より翌明治4年に負債が839 両余増えたのは、「本店差引不足かり」が3,936 両余になり、庄兵衛からの切手米預りが550両 に増え、他に「醤油其外酒下落ニ付損金ニ見候 分引」として新たに200両計上されていること が原因である。このように、幕末から明治初期 にかけての負債額の増加は、本店との「差引不 足借り」が年々増大し、近隣商人からの借金も 増えたことが主たる要因の一つである。

なお、純資産は明治5年に1,020両3分ト7 匁2分7厘の大幅赤字となる。これは前年より 資産が2,000両以上も落ち込んだためであり、 たとえば酒の在庫が約4分の1以下に減少して いる。

#### (2) 本家・本店間の資金の流れ

①元手金・株金

日野本家の決算簿の中に宝暦7年(1757)か

ら弘化3年の「勘定目録」がある<sup>54</sup>。「勘定目録」は帳簿の前半に本店の資産負債勘定,後半に日野本家の資産負債勘定を記載し,本店および本家の各純資産を算出したあとで,両者の純資産を合算し,最後に対前年増減額を算出するという構成となっている<sup>55</sup>。

併本店が作成する決算簿は「仟店勘定細見帳」であり、このなかの「正金之覚」の部に各 出店の株金や元手金が記載されている。

以下は、本家、本店、小田原店の各勘定帳における、弘化3年の小田原店の株金および元手金についての記述部分である56。

「弘化三年午ノ勘定」

♂ 店株金 300両

同店元手金 金500両 「介店勘定細見帳」(正金之覚)

大 店株金分 金300両

同店元手金分 金500両

「小田原店勘定細見帳」(内)

元手金 金500両

小田原店の株金300両および元手金500両は,本家の勘定帳である「弘化三年午ノ勘定」において,本店の資産として計上されている。また,本店の「御殿場本店勘定細見帳」の「正金之覚」においても同額を確認できる。元手金は「小田原店勘定細見帳」では負債として計上されており,本店からの資金融資となっているこ

<sup>54</sup> 天保2年から弘化3年までは「勘定」。

<sup>5</sup> 本家には「本家勘定目録控」および「本家勘定細見目録」という帳簿もある(近江日野商人館所蔵)。 「本家勘定目録控」では、まず「覚」で資産、負債を記し、「徳用物覚」で収益を、「損金物覚」で費用を記す。次に「目録之覚」の部で、同じ年の「勘定目録」と同内容を記載している。すなわち「勘定目録」と、「本家勘定目録控」の「目録之覚」の記載内容は一致している。

<sup>5</sup> 弘化元年のように株金が「土臺金」と記される年もある。「本家勘定細見目録」では文政元年まで 囲店の土臺金,文政2年より小田原店の土臺金が計上される。元手金は文政8年200両,文政9年300両,天保4年以降500両となる。

表9. 利息

会計年		小田原店支	払利息		本店受取	利息	本家受取利息						
	両.分.朱	匁.		両.分.朱	匁.		両.分.朱	匁.					
弘化元年	82.8.0	6.37	本家へ払分也			! !	82. 2. 1	0.00	♡店利足ニ取分				
弘化2年	58.3.0	13.96	本家へ上納之分				59.0.0	0.00	⊗店り足入				
弘化3年	76.1.0	9.75	払分			! !	76. 1 . 2	0.00	⊗店り足入				
弘化4年	64.1.0	11.86	介へ拂分なり	64.1.0	11.86	⊗利取	64.1.2	0.00	⊗店り足入				
嘉永元年	90.2.0	10.3 1	本店へ払分なり	90.2.0	10.3 1	⊗利足取	90. 2 . 2	0.00	⊗店り足入				
嘉永2年	80.3.0	13.4 5	介へ拂分	85.1.0	5. 1 1	♂店利足分取	85. 1. 0	0.00	⊗店り足入				

(出所)「小田原店勘定細見帳」「店勘定細見帳」「本家勘定目録控」(近江日野商人館所蔵)。

とがわかる。一方「小田原店勘定細見帳」では 株金が負債として計上されていない。 弘化3年 に限らず「小田原店勘定細見帳」では、元手金 の記載はあるが株金の記載はない。株金は酒造 株と推測されるが、小田原店の酒造株はあくま で本店が保有する形を一貫してとっていること が、以上の史料により確認できる。「 同 酒店要 用控 において、「一 右酒株借受去ル十月よ り彼地江出店相始メ申候、然ル處右店之儀末永 ク相続仕候ハ、永代 介本店之附店と仕置相續 可致事」とあるように、小田原店の前身である 同店は、本店支配人が酒株諸道具などを関本 村伝蔵から借受けて事業を開始した店で、「永 たがって、酒造株をめぐる本店と 匣店の関係 性は, 小田原移設後も継続していていることが わかる。なお、御殿場酒店は小田原店と異な り、「御殿場酒店勘定細見帳」の「内」に、株 金800両が負債として計上され、本店から資本 融資を受ける関係となっている。

## ②利息

小田原店は酒造元手金を本店から融資されているが、他に本店とのあいだで商品や金銭の貸借があり、それらに対して利息が発生していたとみられる。小田原店の支払利息合計金額は「小田原店勘定細見帳」に記載されている。小田原店、本店、本家の各勘定帳における、小田原店の利息の項を、弘化元年から嘉永2年まで

対照比較したのが〈表9. 利息〉である。「小田原店勘定細見帳」における利息合計の項では、支払先が弘化元年、弘化2年のように「本家へ払分」と記載されている場合もあれば、嘉永元年およびそれ以降のように「本店へ払分なり」とある場合もある。そこで利息合計金額が、本店および本家の勘定帳にどのように記載されているかを検討する。

小田原店からの利息の記述は、弘化元年から 弘化3年は本店の「店勘定細見帳」の「損徳 覚」には記載されていないが、「本家勘定目録 控」の「徳用物覚」に収益として計上されてい る<sup>57</sup>。また、弘化4年から嘉永2年は「店勘定 細見帳」にも、「本家勘定目録」にも共に記載 がある。したがって、少なくとも嘉永2年まで は小田原店の利息は、本店を経由して本家に付 け替えられていたと推測できる。

#### ③為登金

為登金とは、小田原店の益金であると考えられるが、〈表10. 為登金〉で明らかなように、為登金が計上されている年は、天保7年、天保9年、天保13年、天保14年、慶応2年以降をのぞき、純資産のほぼ全額が為登金となっている。「小田原店勘定細見帳」で為登金がどこに宛てられているかを見ると、天保7年、天保8

<sup>(</sup>註) 空白は原史料に数値の記載がないことを示す。

<sup>&</sup>lt;sup>57</sup> 文化10年から天保4年までの御殿場酒店からの益金 上納については、賀川隆行(2005),43頁の指摘があ る。

年は本店が受け取り先になっている。一方,天保10年,天保12年,天保13年,天保14年,弘化4年,嘉永4年は「本家へ」と記されている。このように「小田原店勘定細見帳」の記述を見る限り,為登先は一定していない。

更に「店勘定細見帳」の「損得之覚」の部に おける小田原店からの為登についての記載をみ ると、安政3年~安政6年、文久2年、元治元

表10. 為登金

衣 IU. 為 5	2 並			
会計年	為登金	為登率	主法金	主法率
	両.分.朱	%	両.分.朱	%
天保6年	1 41 34 11			, -
天保7年	50.0.0	42.0		
天保8年	300. 0 . 0	96.8		
天保9年	400.0.0	79.5		
天保10年	72. 0. 0	99.7		
天保11年	23. 3. 0	99.4		
天保12年	17. 2. 0	98.9		
天保13年	8.1.0	29.1		
天保14年	30.0.0	51.0		
弘化元年	60.0.0	99.8		
弘化2年	300.0.0	85.2		
弘化3年	140.0.0	97.2		
弘化4年	250.0.0	97.4		
嘉永元年				
嘉永2年				
嘉永3年				
嘉永4年	500.0.0	99.6		
嘉永5年				
嘉永6年	116. 1. 0	99.5		
安政元年				
安政2年				
安政3年	243.0.0	99.9		
安政4年	350.0.0	97.9		
安政5年				
安政6年				
万延元年				
文久元年				
文久2年	110.0.0	95.8		
文久3年				
元治元年				
慶応元年	425 0 0	74.0	145 0 0	04.0
慶応2年	435. 0. 0	74.9	145. 0 . 0	24.9
慶応3年	1,179.0.0	75.0	392. 0. 0	24.9
明治元年	780. 0 . 0	74.5	260. 0. 0	24.8
明治2年	763. 2. 0	74.9	254. 2. 0	24.9
明治3年	1,184.0.0	74.9	394. 3. 0	24.9
明治4年	689.0.0	74.9	219.3.0	23.8
明治5年				

(出所)「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵)。

(註) 為登率= (為登金/純資産) % 主法率= (主法金/純資産) % ——は帳簿がないことを示す。空白は原史料に数 値の記載がないことを示す。 年では「氏店為登分」の付記を確認できる。一方,「本家勘定目録控」では,「小田原店勘定細見帳」で為登金を本家へと記された年においても,それ以外の年においても,為登金についての記述がない。なお,御殿場酒店からの為登については,史料の現存が確認できる文化10年から天保5年および天保7年,弘化元年から嘉永2年,万延元年から文久元年の「本家勘定細見帳」において,その収益について記述される「徳用物覚」の部に,「⑪店賣だし」「⑪店 徳」などと金額が記載されている。その金額は,同じ年の「御殿場酒店勘定細見帳」で記載された純資産額とほぼ同額である。御殿場酒店では純資産のほぼ全額を為登金として,本家に上納していることが確認できる。

そもそも小田原店や本店の勘定帳は本家へ宛 てられたものである。その本家の勘定帳では, 小田原店からの為登金の記載がほぼみられない。ということは,「小田原店勘定細見帳」では計算値として為登金額を算出し,本店勘定帳にも記載されはするものの,実際には本家に渡っていない可能性が考えられる。御殿場酒店と異なり,為登金として「小田原店勘定細見帳」に計上された益金は,必ずしも本家への上納を意味しているわけではないのである。

たとえば嘉永 4 年の「小田原店勘定細見帳」では500両を「本家へ為登二成ル割合金也」とし、そのうち100両を「用意金二のけ置ク」とする。そして最後に「引メ金四百両也、此分人数割ニスル」とある。同年の純資産、すなわち過上は501両 3 分ト 8 匁 8 分 9 厘であり、為登金は後述するように、文久 2 年までは過上のほぼ全額をあてているので、この年の為登金の割合は500両とされた。そのようにして500両を計上しているものの、そこから100両を用意金の

<sup>◎</sup> 例外は、文久2年だが「本家勘定目録控」の「徳用物覚」で360両が「②賣出し」とされ、内60両が「用意のけ給金帳へ入」で、引ィ300両が「四人給金帳へ入」とされている。

ため差し引いて、残る400両を人数で割るというのだから、上納金としての為登金は実質的には残らないことになる<sup>59</sup>。

文久2年までは、純資産のほぼ全額を為登金として算出していたが、慶応2年以降は75%となっている。残る25%は主法金にあてられている。文久2年までとそれ以降とで、為登金の比率に変化が見られるのは、文久2年に行われた山中家の家政改革のなかで、奉公人に対する報奨金の支給に関する主法制度が確立したためといえる。たとえば、慶応2年には145両が「主法分本店へ預け」、慶応3年には392両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法分本店江預け」、慶応4年には260両が「主法方本店工預け」、とあり、これらは純資産の25%に相当する。すなわち、文久期の家政改革以降、益金の75%を為登金、25%を主法金として計上するようになった。

慶応2年に打撃を受けた酒造高は、明治4年 以降400石台に回復し、明治5年もほぼ同じ石 高を維持するが、その明治5年の「小田原店勘 定細見帳」では純資産がマイナス1,020両余, 営業利益はマイナス1,884両余と、決定的な崩 壊を見せる。したがってこの年は当然ながら、 為登金および主法金を計上することはできな い。このことは、主法制度の実施を記述した文 久2年9月「 介改格主法変革堅固手段控60」か らも確認できる。同史料は各店舗の為登金およ び主法金を年ごとに記した帳簿である。そのう ち「壬申年主法被下分」(明治5年)の小田原 店についての記述をみると,「大無皆」とさ れ、為登金および主法金は共に計上されていな い。またその前に、「 (天) 店申八月金千両也不足 勘定二付,主法残金之内 6 弐分五厘分損分助合

致遣ス」とあり、明治5年の純資産をマイナス 1,000両としたうえで、その25%分は主法繰越 合計金額から補填されたことがわかる<sup>61</sup>。この 明治5年上期で小田原店および御殿場酒店の 「勘定細見帳」は途絶え、本店、伊豆店、沼津 店の勘定帳も明治5年作成分で一旦途切れる。 再び史料が確認できるのは、本店、出店共に明 治9年2月作成分からであり、且つ、金額記載 は両表記から円表記に移る。純資産、営業利益 共に、大幅なマイナス値を計上する明治5年を もって、近世的経営の終点を迎えるのである。

#### 6. おわりに

山中兵右衛門家の決算帳簿である各店舗の 「勘定細見帳」に記載された取扱い品から、出 店の経営実態を解明する試みは従来の研究にな かったが、本稿では小田原店に焦点を絞り込 み, 天保期から明治初期における「小田原店勘 定細見帳」を検討した。その結果,以下の点が 明らかになった。「小田原店勘定細見帳」は複 式帳簿の形式をほぼとりつつ、中間決算と本決 算を行っている。また,酒だけでなく醤油の醸 造, 販売を行い, 酒や醤油の原料や, 穀類など を中心とする商品の仕入れと販売を行ってい る。特に米は、酒造の原料調達および自家消費 用として購入するのみならず、米そのものを大 量に販売していることがわかった。すなわち, 小田原店は製造業と商業の両業に従事している ことが鮮明になった。弘化から安政期は安定し た酒造量を保っていたが、幕末、特に慶応2年

<sup>&</sup>lt;sup>59</sup> なお、『株式会社山中兵右衛門商店260年史』(1980),21 頁では、小田原店の利益配分について「この店は実 質上御殿場本店重役の事業で後々まで永くその利益 を別勘定とし、分合によつて一部を店員の私徳とし ていたが、2代目安太郎のとき他店と共通勘定に改 めた|と述べられている。

<sup>&</sup>lt;sup>60</sup> 近江日野商人館所蔵。

<sup>&</sup>lt;sup>61</sup> 青柳周一は明治5年の小田原店の事例の他に,本店や伊豆店が損銀を出した場合,その弁銀支出が主法金から支出されていることを例に「主法制度の実施の過程では多額の繰越金が発生しているが,ここから各店の損金高の2割5分について弁銀を支出するという方法による本店・出店の損失補填も行われた」と指摘している(青柳周一(2006b),117頁)。なお,文化10年から文政11年において 団店や⊗店で損金が出た場合は,本家が弁銀を支出していた(賀川隆行(2005),第10表「山中家日野本家の費用(主要項目)」),42頁。

には米価高騰をうけて激減する。資金面に関しては、元手金は本店から融資されているが、株金の融資は受けていない。よって酒造株は本店の所有であることが推測できる。利息は本家に納められているが、為登金は他店舗、特に御殿場酒店と異なり、少なくとも嘉永期までは本家に上納されていない。これらのことから、本店の「附店」としての小田原店の位置づけが明らかになった。

本稿では以上の点を明らかにしたが、小田原 店の「勘定細見帳」が中間決算、本決算の年二 回決算を行うことで,経営の実際にどのような 機能や効果をもたらしているのか、という点に まで踏み込むことはできなかった。また、山中 家の発展、拡大には、御用商人としての側面の あったことが推察されるが、小田原藩に対し、 具体的にどのような資金や物資の提供がなされ ていたのか、小田原店が果たした役割がどの程 度のものであったかなど、解明するには至らな かった。出店経営の全貌を解明するという点で は、残りの出店についても本稿と同様の分析が 必要となる。その上で、本家、本店、出店の間 の原料,商品,醸造品や元手金,株金,利息, 益金などの資金をめぐる総合的な流れについて 分析し、山中家全体の経営の内実を明らかにす ることが今後の課題となる。

#### 参考文献

#### 〈主要史料〉

「小田原店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵) 「御殿場酒店勘定細見帳」(近江日野商人館所 蔵)

「伊豆店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵) 「沼津店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵) 「店勘定細見帳」(近江日野商人館所蔵) 「本家勘定目録控」(近江日野商人館所蔵) 「勘定目録」(近江日野商人館所蔵) 「団 酒店要用控」(近江日野商人館所蔵) 〈稿本・私家版〉

稿本『山中兵右衛門商店二百五十年史』上·下 (1976)

私家版『株式会社山中兵右衛門商店260年史』 (1980)

〈刊行資料〉

石井良助·昭藤弘司編『幕府御触書集成』 5 岩波書店(1994)

石野瑛編『小田原及箱根史料』名著出版 (1932)

小田原市編『小田原市史』通史編近世(1999) 御殿場市史編さん委員会編『御殿場市史』 8 通 史編上(1981)

滋賀県日野町教育会編『近江日野町志』 (1930)

三井家編纂室編『自天明七年至明治四年大阪金 銀米銭并為替日々相場帳』 2 (1916)

三井文庫編『近世後期における主要物価の動 態』増補改訂 東京大学出版会 (1989)

南足柄市史編『南足柄市史』 3 資料編近世(2) (1993)

## 〈研究文献〉

青柳周一 (2006a)「山中本家 (日野) 保管の近世文書の特徴について」『近世・近代における商業資本発達史の研究 -近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究-』平成15年度~平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書 (代表:筒井正夫,課題番号:15330068)

青柳周一(2006b)「山中兵右衛門家における文 久家政改革 -とくに主法制度の導入につ いて-」『近世・近代における商業資本発 達史の研究 -近江商人・山中兵右衛門家 の経済史的研究-』平成15年度~平成17年 度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究 成果報告書(代表:筒井正夫,課題番号: 15330068)

- 井上定幸(1963)「北関東における近江商人の 醸造経営 -上州藤岡町・原田四郎左ヱ門 店の場合-(-)(二)」『郡大史学』9,10 上村雅洋(2000)『近江商人の経営史』清文堂 上村雅洋(2004)「近江商人正野玄三家の奉公 人と給金」『大阪大学経済学』54(3)
- 字佐美英機研究代表 (2003)「近世・近大商家 文書に関する総合的研究」平成12年度~平 成14年度科学研究費補助金(基盤研究(B) (2))研究成果報告書(課題番号12410089)
- 宇佐美英機 (2006a)「近江国日野商人の特徴」 『近世・近代における商業資本発達史の研究 -近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究-』平成15年度~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(代表:筒井正夫,課題番号:15330068)
- 宇佐美英機 (2006b)「近江日野商人山中兵右衛門家の奉公人請状」『近世・近代における商業資本発達史の研究 -近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究-』平成15年度~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(代表:筒井正夫,課題番号:15330068)
- 宇佐美英機 (2007) 「明治期山中兵右衛門家の 奉公人請状」 『彦根論叢』 365
- 江頭恒治(1959)『近江商人』弘文堂
- 江頭恒治(1965)『近江商人中井家の研究』雄 山閣
- 小倉栄一郎 (1962)『江州中井家帖合の法』ミ ネルヴァ書房
- 賀川隆行 (1997) 「江戸下酒問屋小西屋の経 営」 『三井文庫論叢』 31
- 賀川隆行(2002)「江戸畳表問屋西川甚五郎家 の経営構造」『三井文庫論叢』36
- 賀川隆行(2005)「日野商人山中兵右衛門家の 勘定目録(上)|『三井文庫論叢』39
- 賀川隆行(2006)「関東地方における日野商 人」『近世・近代における商業資本発達史

- の研究 -近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究-』平成15年度~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(代表:筒井正夫,課題番号: 15330068)
- 菅野和太郎(1941)『近江商人の研究』有斐閣 佐々木哲也(2003)「山中兵右衞門家文書(御 殿場・小田原・沼津)目録の構成」御殿場 市立図書館・日野商人山中兵右衞門家文書 研究会『日野商人山中兵右衞門家文書目 録』
- 佐々木哲也(2006)「日野商人山中兵右衞門家の出店概要と史料構成 -本家・出店経営文書の現存状況とその特徴-」『近世・近代における商業資本発達史の研究 -近江商人・山中兵右衛門家の経済史的研究-』平成15年度~平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書(代表:筒井正夫,課題番号:15330068)
- 末永國紀 (1997) 「幕末維新期山中兵右衛門家 の支配人経営と家政改革」『近代近世商人 経営史論』有斐閣
- 末永國紀 (2003) 「商人資本の畜積過程 -近 江商人矢尾喜兵衛家の場合-」『経済学論 叢』 54(4)
- 鈴木直二 (1977) 『徳川時代の米穀配給組織』 国書刊行会
- 谷本雅之(1990)「銚子醤油醸造業の経営動 向」林玲子編『醤油醸造業史の研究』吉川 弘文館
- 筒井正夫(2006)「御殿場地域における山中兵 右衛門家の位置」『近世・近代における商 業資本発達史の研究 -近江商人・山中兵 右衛門家の経済史的研究-』平成15年度~ 平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B) (2))研究成果報告書(代表:筒井正夫,課 題番号:15330068)
- 日本福祉大学知多半島総合研究所・博物館酢の 里 (1998) 『中埜家文書にみる酢造りの歴

史と文化』1-5,中央公論社

曲田浩和(2002)「帳簿にみる中野又左衛門家 の経営について- 一九世紀前半を中心 に-」大野瑞男編『史料が語る日本の近 世』吉川弘文館

松元宏 (2006a)「日野商人山中兵右衞門商店の 歴史」『近世・近代における商業資本発達 史の研究 -近江商人・山中兵右衛門家の 経済史的研究-』平成15年度~平成17年度 科学研究費補助金 (基盤研究(B)(2)) 研究成 果報告書 (代表:筒井正夫,課題番号: 15330068)

松元宏 (2006b) 「明治前期の御殿場 邱本店

「勘定細見帳」について」(日野商人山中 兵右衞門家文書研究会『近江日野商人山中 兵右衞門家の資料的研究』御殿場市立図書 館

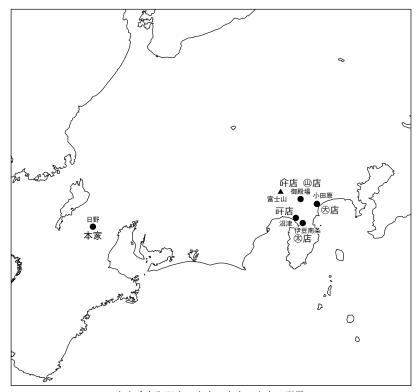
美馬祐造(1972)「河州小田原藩領の在払制 度」『ヒストリア』60

宮本又郎(1988)『近世日本の市場経済』有斐 関

本村希代(2004)「近江商人正野玄三家の合薬 流通」『経済史学』39(3)

柚木重三 (1940)『灘酒経済史研究』象山閣 柚木学 (1975)『日本酒の歴史』雄山閣 柚木学 (1987)『酒造りの歴史』雄山閣

## 参考地図



山中兵右衛門家の本家・本店・出店の配置

## Business Activities of Omi–Hino Merchant, Yamanaka Hyouemon Family, 1833–1872: The Case of Odawara Branch

#### Atsuko Suzuki

Yamanaka Hyouemon family who was one of Omi-Hino Merchants established five branches in Gotenba area located at the foot of Mt. Fuji in Edo period. Focusing on the bookkeeping of Odawara branch, this paper examines the business activities of Yamanaka family.

- 1) The financial statements of Odawara branch were prepared twice in a year; the half year results and the full year results. They were based upon a double entry bookkeeping system.
- 2) Analyzing of the profit and loss statements, this paper points out the aspects of production, purchase and sale.
  - The main business of Odawara branch was not only to brew sake and soy sauce, but also to sell
  - High productivity of sake was stable between 1844–1859. However, it deteriorated in the end of Edo period because of the jump in rice price.
- 3) Focusing on the balance sheet, the relationship among Hino head office, Gotenba main branch and Odawara branch is clarified.
  - Hino head office loaned the start up capital to Odawara branch.
  - Hino head office earned the interest from Odawara branch.
  - Odawara branch paid the profit of current term to Gotenba main branch.